

マルセイユにおける移住現象(1806-1911年)-国内移住から「移民」の時代へ-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 駿台史学会 公開日: 2013-05-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 國府, 久郎 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/15957

マルセイユにおける移住現象 (1806-1911年)

—— 国内移住から「移民」の時代へ ——

國 府 久 郎

要旨 19世紀から20世紀初頭にかけてのフランスでは、出生率の低下が原因で人口増加が停滞気味の中、農村部から都市部への人口集中、すなわち都市化が進行していた。しかし、産業化が進展するフランスでは、国内からの移住者だけでは労働力は十分ではなく、早くから外国からの移住者、移民に頼らざるを得ない状況にあった。本稿では、国勢調査などの統計資料を用いながら、国内移住も重要で、なおかつ外国人、特にイタリア人が極めて集中していたフランス南部の港湾都市マルセイユにおける、移住の長期的な動向を具体的に明らかにすることを目的としている。その際、国内の移住者から外国人の移住者へと変わりつつある過程で、当時のマルセイユの人々が移住という現象をどのように捉えていたのかも検討する。1901年には、マルセイユの総人口に占めるイタリア人の割合は18%と頂点に達しており、外国人人口に占める割合も91%にまで上っていた。このイタリア人たちは、19世紀後半に建設された都市北部の新港沿いの工業中心地帯で、多くが工場労働者として働いていたが、都市固有の多様な労働力需要を満たすために、その他にも様々な職業にマルセイユで従事していたのであった。

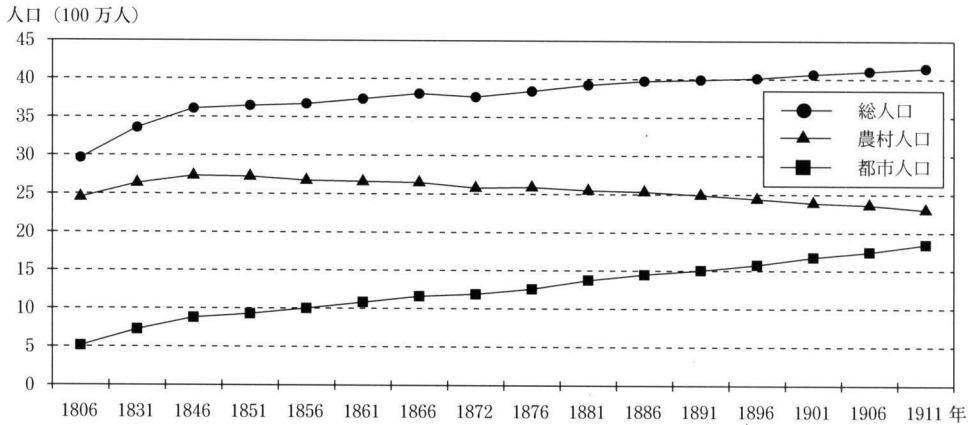
キーワード：都市化、マルセイユ、国内移住、移民、イタリア人

はじめに

19世紀から20世紀初頭にかけてのフランスの人口動態の特徴といえば、イギリスやドイツなどの他の西ヨーロッパ諸国と比較した場合の出生率の低さと、それに伴った人口増加の緩慢さをまず挙げることができるだろう。1801-1911年の期間で、フランスの人口は約2700万人から約4000万人へと、確かに約1.5倍は増加したが、ほぼ同じ期間にイギリスの人口は約1100万人から約4100万人へと約4倍も増加し、ドイツの人口は約2200万人から約6500万人へと約3倍増加していた。特に19世紀の後半においては、イギリスの人口が約2100万人から約4100万人へと、2倍近く増加しているのに対して、フランスの人口は約3600万人から約4000万人へと11%しか増加していない¹⁾。そのために、この時期に大規模に行われていたアメリカ大陸などへの海外の移住に、フランスは大きく参加することはなかった²⁾。

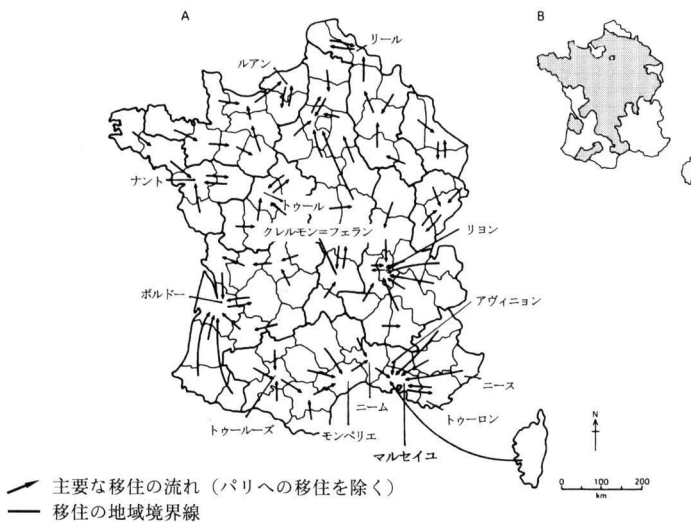
しかし、こうした低い人口増加率を背景としながらも、産業化が進行するフランスにおいて

も農村部から都市部への人口集中，すなわち都市化は見受けられた（図1）。1800年代から第一次大戦前までに，総人口の年平均の増加率は0.3%でしかなかったが，都市人口の年平均増加率は1.22%にまで達しており，都市に居住するフランス人の割合も20%以下から44.6%にまで伸びていた³⁾。都市の自然増（出生数と死亡数の差）は極めてわずかで，ゼロに近いことがよくあり，時にはマイナスさえ示していたので，都市の人口増加の要因としては社会増（移住）が重要であった⁴⁾。このフランス国内の移住に関しては，1911年の国勢調査の出生地から作成された図2-A，図2-Bを参考にしながら，いくつかの特徴を手短かに把握してみたい。図



Jacques Dupâquier, dir., *Histoire de la population française, III, de 1789 à 1914*, Paris, 1988, pp. 123, 130, 132. より作成。

図1 フランスの総人口と都市人口・農村人口の推移 (現在の国境の範囲)



P. E. White, "Internal migration in the nineteenth and twentieth centuries", in Ogden and White eds., p. 23. より作成。

図2-A 各県からの主要な移住の流れ (パリへの移住を除く)

図2-B パリへの主要な移住を行っていた諸県 (黒塗りの部分)

マルセイユにおける移住現象（1806-1911年）

2-A では、パリへの移住は除かれているが、それでもパリ盆地，リヨン，マルセイユ，ボルドー，さらにはクレルモン＝フェラン，ニーム，モンペリエ，トゥールーズ，ナント，トゥール，ルアン，リールなどへの移住が確認でき，いくつかの地域経済を基盤にしてフランスの都市化が進行していったことがわかる⁵⁾。次に，パリへの主要な移住を行っていた諸県を表す図 2-B からは，フランスの三分の二の諸県（黒塗りの部分）がこれに該当し，フランスの国内移住においては，パリが圧倒的な存在であったことが確かめられるであろう⁶⁾。

1911年の二つの図から把握できたフランス国内の移住の特徴としては，いくつかの地域経済を基盤にして移住による都市化が進行していたこと，パリへの移住が圧倒的であったことを指摘できる。しかし，緩慢な人口増加を背景に移住が行われていたフランスにおいては，さらにもう一つの重要な特徴，外国からフランス国内への移住も付け加えて置かなければならない。産業化が伸展するなかでフランスは，国内からの移住者だけでは労働力不足を解消することはできず，早くから外国からの移住者（移民）に頼らざるを得ない状況にあった（表 1）。1889年の国籍法の影響にもかかわらず⁷⁾，フランスの総人口に占める外国人人口の割合は，1851年の1.05%から，1911年の2.86%となり，とりわけイタリア人人口とベルギー人人口が多数であった。1851年の段階では，外国人人口の中ではベルギー人が最も多かったが，イタリア人が徐々に勢いを増していき1901年にはベルギー人の数を上回るようになる。フランス国内の外国人の地理的分布においても，イタリア人はベルギー人より広範囲にフランスに移住しており，特に南フランス諸県への集中は著しく，マルセイユのあるブーシュ＝デュ＝ローヌ県などは1911年には十万人を越えていたのであった⁸⁾。

19世紀から20世紀初頭にかけてのフランス全体の都市化と移住については，これで三つの大まかな特徴を把握できた。日本におけるフランスに関する移住の歴史研究では，最も広範囲に大量の移住者を引き付け，早くも19世紀の前半から人口が急増していたパリの事例が，これまで紹介され，研究されつつある⁹⁾。そこで本稿では，地域経済を基盤にした移住による都市化が進行しており，さらには国際的な色彩も濃かったブーシュ＝デュ＝ローヌ県の県庁所在

表 1 フランスにおける外国人人口の推移（1851-1911年）（人，%）

	1851	1866	1876	1881	1891	1901	1911
外国人人口	379,289	655,036	801,754	1,001,090	1,130,211	1,037,778	1,159,835
ベルギー人人口	128,103	275,888	374,498	432,265	465,860	323,390	287,126
イタリア人人口	63,307	99,624	165,313	240,733	286,082	330,465	419,234
帰化人人口	13,525	16,286	34,510	77,046	170,704	221,784	252,790
総人口に占める 外国人人口の割合	1.05	1.7	2.1	2.6	2.8	2.6	2.86

Dupâquier, op. cit., p. 216; 帰化人人口のみ, Ministère du Travail et de la Prévoyance Sociale, Bureau de la Statistique Générale de la France, *Résultats statistiques du recensement général de la population effectué le 5 mars 1911*, Paris, 1913-1915, t. 1-2^e partie, p. 51. より作成。

地、マルセイユに注目してみたい。欧米における、マルセイユの移住に関する主な歴史研究をここで整理してみると、アメリカの歴史家ウィリアム・シーウェルの『構造と流動性：マルセイユの男と女たち 1820-1870』¹⁰⁾が何よりも重要となるであろう。シーウェルの研究からは、1820年から1870年までのマルセイユの都市や経済の状況、移住などについて詳しく知ることができ、19世紀マルセイユ研究の基礎文献となっている。ただし、移住に関しては、利用した史料（主に婚姻証）の性質から、出稼ぎ労働者や移住してくる前にすでに結婚していた移住者の分析が不可能であり、当時出稼ぎ労働者もまだ多かったイタリア人の実数などは十分ではないようである¹¹⁾。一方、外国からの移住者、移民に関してはエミル・テミム他『マルセイユ移民史』の二巻¹²⁾が参考になるが、国内からの移住者には殆ど考慮が払われていないために、19世紀マルセイユの人口増加が、外国人、特にイタリア人の移住によってのみ引き起こされたかのような印象を与えてしまっている¹³⁾。

以上の諸研究からは、マルセイユへの主要な移住の流れが、どの時期に国内移住から移民へと変化していったのかを具体的に把握することはできない。こうした研究の状況を踏まえて本稿では、主に統計資料に基づきながら、19世紀から20世紀初頭にかけてのマルセイユの移住の長期変動を明らかにしていくことにする。その際、国内の移住者から外国人の移住者へと変わりつつある過程で、当時のマルセイユの人々が移住という現象をどのように捉えていたのかについても検討する。そして、移住者を数量的に把握した後は、都市における移住者の地理的分布を確認して、移住者の居住傾向が都市改造や就業状態といかに密接に関わっていたのかを概観しておきたい。

本稿では史料として、19世紀初頭以降、ほぼ五年おきに実施された国勢調査¹⁴⁾、1878年から刊行された統計年鑑¹⁵⁾、当時のマルセイユの統計学者、経済学者、実業家、医師などの著作や論文、小冊子などを利用する。又、マルセイユのイタリア人たちの状況をより詳しく知るために、在マルセイユ・イタリア領事館の副領事であったロッシ L. Rossi の報告¹⁶⁾も参考にした。統計資料として本稿では国勢調査を多く用いているので、移住との関連でのみ国勢調査についてまとめてみると、まず1846年から浮動人口の調査が始まり、都市は公式に2000人以上と定められるようになる。1851年には初めて国籍と宗教が調査され、1861年の調査では、フランス国内の他県出身（出生）者がごく簡単にはあるが確かめられる。1872年からは、国勢調査の基になる手稿の住民名簿である人口調査原簿 *listes nominatives* に出生地が記載されるようになった¹⁷⁾。

1876年の調査からは、すでにパリでは1836年と1851年に利用されていた、個人調査票 *bulletins individuels* が義務化される。国勢調査は通常、被調査者による自己記入方式（自計方式）で行われるが、この1876年の調査のみ調査員記入方式（他計方式）が採用された。1891年の国勢調査においては、フランス国内の他県出身者が、各県ごとにより詳細にわかる

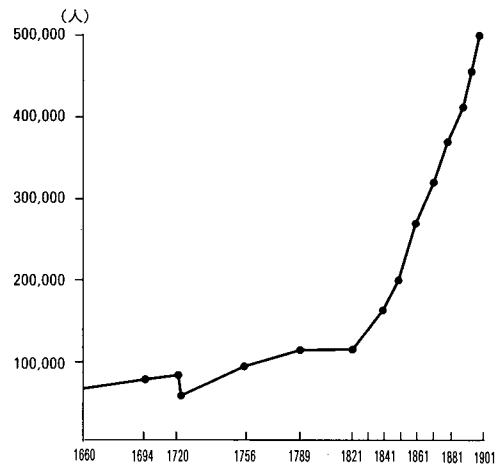
が、性別、職業、年齢との移住の関係が明らかになるのは、1901年と1911年の国勢調査になってからであった。そして、この時期に統計集計の技術的な革新も行われ、1896年の職業調査から、統計データが機械によって処理されるようになる¹⁸⁾。

こうした一連の国勢調査を主に実施した、フランス一般統計局 Bureau de la Statistique Générale de France は、1840年に創設されるが、十分に活躍するようになるのは第二帝政期になってからであった。又、移住の研究に関してより重要な事項である、前回調査時の居住地との比較は、1962年の国勢調査まで待たなければならなかった¹⁹⁾。国勢調査は、移住だけを把握することを目的としていなかったため、その利用にはいくつもの問題点がある。それでも、長期的な視野で移住者の数量的動向を知るのには、最も基本となる情報を与えてくれる史料であることは確かであろう²⁰⁾。

第1章 マルセイユの人口増加（1806-1911年）

パリほどの規模ではないが、マルセイユも19世紀以降多くの移住者を引き付け、人口が急激に増加していた（図3）。マルセイユは1669年に自由港となり、輸入した原料を関税が課されることなく利用が可能であったが、商品をフランス国内に運ぶ際は税金を払わなければならなかったため、特に再輸出が盛んに行われていた。マルセイユの商人が事実上独占していたレヴァント貿易や、西インド諸島を中心とする大西洋貿易で18世紀のマルセイユの商業は発展し、人口も増加傾向にはあった²¹⁾。しかし、ヨーロッパでのペスト流行の終焉を告げる最後の惨事であった1720年のマルセイユでの大流行や²²⁾、海上貿易に依存していたマルセイユの経済をほぼ麻痺状態にしてしまった1806年の大陸封鎖などが原因で、1660年から1821年までの

マルセイユの人口の年平均増加率は約0.4%でしかなかった²³⁾。マルセイユは1794年に自由港ではなくなったので、19世紀にはフランス国内が主要な市場となった。そして、ナポレオン戦争後に再び経済成長を遂げ、人口も着実に増加するようになる。歴史家シーウェルは、マルセイユの人口の年平均増加率が約3.7%までに達した1821年から1872年までの間が、マルセイユの人口推移で最も重要な期間であったとする。だが、より具体的に1806年から1911年までの五年ごとの人口推移を確認してみると、1870年代以降も増加数などはかなりの数に上っているのがわか



William H. Sewell, Jr., *Structure and Mobility: The Men and Women of Marseille, 1820-1870*, Cambridge, 1985, p. 2.

図3 マルセイユの人口推移（1660-1901年）

表2 マルセイユの人口の推移 (1806-1911年)

調査年次	人口	増加数	増加率(%)	調査年次	人口	増加数	増加率(%)
1806	99,169			1861	260,910	27,093	11.59
1811	96,271	-2,898	-2.98	1866	300,131	39,221	15.03
1816	106,872	10,601	11.01	1872	312,864	12,733	4.24
1821	109,483	2,611	6.02	1876	318,868	6,004	1.92
1826	115,943	6,460	5.90	1881	357,530	38,662	12.12
1831	132,300	16,357	14.11	1886	375,378	17,848	4.99
1836	148,597	16,297	12.32	1891	403,749	28,371	7.56
1841	156,060	7,463	5.02	1896	442,239	38,490	9.53
1846	183,186	27,126	17.38	1901	491,161	48,922	11.06
1851	195,138	11,952	6.52	1906	517,478	26,317	5.36
1856	233,817	38,679	19.82	1911	550,619	33,141	6.40

1806-1816年: Docteur Hippolte Mireur, *Le Mouvement comparé de la population à Marseille, en France et dans les états de l'Europe*, Paris, 1889, p. 14; 1821-1876年: Ministère de l'Agriculture et du Commerce, Service de la Statistique Générale de France, *Annuaire statistique de la France*, 1878, Paris, reproduit, Nendeln, Liechtenstein, 1968, pp. 8-9; 1881-1886年: Mireur, op. cit., pp. 16-18; 1891年: Ministère du Commerce, de l'Industrie, des Postes et des Télégraphes, Office du Travail, Statistique Générale de la France, *Annuaire Statistique de la France*, 1892-1893-1884, Paris, reproduit, Nendeln, Liechtenstein, 1968, p. 10; 1896-1901: Idem. *Annuaire Statistique de la France*, 1902, p. 4; 1906-1911: Ministère du Travail et de la Prévoyance sociale, Statistique Générale de la France, *Annuaire statistique de la France*, 1912, Paris, reproduit, Nendeln, Liechtenstein, 1968, p. 4. より作成。

る(表2)。

マルセイユの人口は1806年の99,169人から、1911年の550,619人へと変化し、およそ一世紀の間に約五倍増加したことになる。人口増加数がとりわけ顕著な時期は、七月王政期にほぼ該当する1826-1836年、1841-1846年の間、第二帝政期の1851-1866年の間、第三共和政期の1876-1881年、1891-1911年の間である。逆に、増加数が相対的に少ない時期は、1836-1841年、1846-1851年、1866-1876年、1881-1886年の間であり、コレラの流行や政治的事件、経済状況の悪化などの影響が指摘されている²⁴⁾。

この著しい人口増加の要因を次に検討してみると、パリなどのフランス国内の諸都市と同様に、移住がやはり重要となる。出生届と死亡届の記録によれば、1806年から1878年までの73年間で、出生数の超過はわずか11,880人に過ぎず、その後も状況は良くならなかった²⁵⁾。人口数が38,662人も増加した1876-1881年の間は1,513人の死亡数の超過、1881-1886年の間は3,887人も死亡数の超過が、マルセイユの医師であったミルール博士により確認されている²⁶⁾。さらに、公式な統計でも、1891-1896年の間のブーシュ＝デュ＝ローヌ県の都市部においては、2,598人の死亡数の超過が記録されていた²⁷⁾。よって、急激な人口増加は、自然増(出生数と死亡数の差)によるものではなく、社会増(移住)によって引き起こされたと考えられる。まさにミルール博士が言うように、「…外部からの移住がなければ、マルセイユの人口数は増加しないで減少していたであろう²⁸⁾。」

人口増加の要因となった移住は、19世紀から20世紀初頭の間はその主体や形態を徐々に変えてもいた。次章では、この期間の移住を、国勢調査の結果や、政体の変化の年代などを考慮

して、大まかに三つの時期に区分しながら考察を進めていきたい。近隣諸県のフランス人による移住が主であった1806-1850年を第一の時期、フランス人によって大規模に移住が行われ、外国人による移住（移民）も徐々に増加し始めていた1851-1871年を第二の時期、外国人、特にイタリア人による移住が急増した1872-1911年を第三の時期とする。

第2章 移住の段階と形態

(1) 各時期の移住の特徴—国勢調査の年次を基準にして—

マルセイユでは、経済が再び成長し始めるナポレオン戦争後の1816年頃から、フランス国内の移住が次第に増加していた。ただし、婚姻証の分析を行ったシーウェルによれば、第一の時期に該当する1821-1822年間の移住は、規模はそれほど大きくなく、地理的な範囲も限られ、プロヴァンス地方からの移住者が半数近くを占めていた²⁹⁾（表3、図4）。プロヴァンス地方などの近隣地域からの移住は、職業的、教育的背景は不十分ではあるが、マルセイユと文化的に類似しており、家族や親族のつながりが濃密な人たちによって行われていた。一方、後背地（移住の影響圏）などの遠隔地域からの移住は、職業的地位がすでに高く教育水準もより高い、特に男性によるものであった。三分の一以上の女性移住者には、マルセイユに両親がおり、移住が家族単位で行われることで、保護的な環境で生活することができていた。マルセイユに両親がいない女性移住者も、たとえ読み書きのできない農民の娘であったとしても、裕福な家庭の女中として働くことで、同じく保護的な環境を手に入れることができていた³⁰⁾。

マルセイユで結婚をして、おそらく定住を目的としていた移住者の他にも、すでに前世紀から、南アルプス山脈やイタリア半島からの大勢の労働者が出稼ぎに来ていた。こうした出稼ぎ労働者が多く含まれる、1791-1792年のガルニ（家具付きの貸し部屋）の宿帳を分析したミシェ

表3 マルセイユへの移住者の出生地
1821-1822年の婚姻証（%）
（実数は不明）

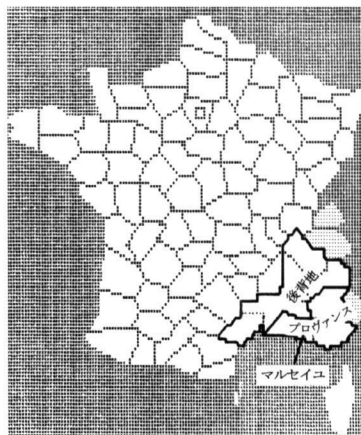
出生地	新郎	新婦
ブーシュ＝デュ＝ローヌ県	19* ¹	24* ¹
他のプロヴァンス地方	29	31
プロヴァンスの合計	48	55
他の後背地	14	17
他のフランス地域	19	9
イタリア* ³	13	13
他の外国	6	7

表4 ガルニの宿泊者の出生地
1791-1792年の宿帳（%）
（括弧内の数値は実数）

ガルニの宿泊者* ²
19 (227)
11 (132)
29 (359)
24 (300)
33 (407)
10 (126)
3 (36)

*¹ マルセイユ生まれは含まれない。*² 1,228人の宿泊者のうち9割以上が男性。*³ サヴォワ、ニースが含まれる。

表3: William H. Sewell, Jr., *Structure and Mobility: The Men and Women of Marseille, 1820-1870*, Cambridge, 1985, p. 163; 表4: Michel Vovelle, "Le prolétariat flottant à Marseille sous la Révolution française", *Annales de démographie historique*, 1968, p. 126. より作成。



Sewell, op. cit., p. 162. より作成。

図4 マルセイユへの移住の範囲
（点付きの諸県は1860年にフランスに併合）

表5 マルセイユへの移住者の出生地（1821-1869年までの推移）（％）

出生地	新 郎			新 婦		
	1821-2	1846-51	1869	1821-2	1846-51	1869
ブーシュ＝デュ＝ローヌ県	19	15	10	24	13	10
他のプロヴァンス地方	29	20	15	31	25	14
<u>プロヴァンスの合計</u>	<u>48</u>	<u>35</u>	<u>25</u>	<u>55</u>	<u>38</u>	<u>24</u>
他の後背地	14	16	20	17	22	25
他のフランス地域	19	24	35	9	19	37
イタリア*	13	18	15	13	16	10
他の外国	6	7	4	7	5	4

*1869年のみサヴォワ、ニースが含まれない。Sewell, op. cit., p. 178. より作成。

ル・ヴォヴェルの研究を参考にすれば、近隣地域に加えて、後背地に位置するアルプス山脈や、イタリアのピエモンテ、ジェノヴァなどからも、不熟練の労働者として出稼ぎ労働者が来ていたことが確かめられる³¹⁾（表4，図4）。表3の1821-1822年の新郎の出生地は移住者のみの割合で、表4のガルニの宿泊者はマルセイユ出身者も含まれるために、単純に二つの表を比較することはできないが、それでもガルニの宿泊者は、フランス国内の遠隔地域からの移住がより多かったとは言えるであろう。ガルニには出稼ぎ労働者に加えて、フランス巡歴を行う職人組合の熟練労働者たち（特に靴工，仕立工，指物工，樽製造工など）が職人宿として利用していたので、遠隔地域からの移住の割合が高くなっていた。又，リヨンからは商人が多数来ていたことも、遠隔地域からの移住の割合の増加に影響を与えていたのである³²⁾。

1830-1840年代に入ると、手工業もまだ重要ではあったが、石鹼製造や砂糖の精製，機械（特に蒸気機械）の組み立て，化学（合成洗剤）などの産業が発展した。そして，不熟練労働者の数が増すに連れて，マルセイユ全体の人口も増加傾向を示すようになる（表2）。経済と人口の成長から，いくつかの都市の産業基盤にかなりの負担が掛かるようになっており，まずはかつてより問題であった慢性的な水不足を解消するために，1840年代から運河が建設されることになる³³⁾。この運河の建設時には，肉体労働者のほぼ全員が，ピエモンテやジェノヴァ出身の人から雇われ，1843年に始まったマルセイユ－アヴィニョン間の鉄道敷設工事においても同様の状況であった³⁴⁾。鉄道はさらに1852年にパリと直接つながり，フランス国内からの移住の地理的範囲を大きく広げる結果ともなった（表5，図4）。

第二帝政期に該当する，第二の時期である1851-1871年の間は，フランス国内からの移住がかつてない規模で行われた。この時期になると，遠隔地域や近隣地域，男性や女性といったそれぞれの移住の，職業的，教育的な背景の差はなくなりつつあった。後背地を越えたより遠くのフランス地域から，鉄道に乗ってマルセイユにやって来た農民や労働者出自の移住者たちは，以前のエリート層や職人組合の熟練労働者たちに代わる，遠隔地域からの移住の中心的存在となっていた³⁵⁾。第二帝政期のマルセイユは，商業が飛躍的に発展しており，フランス国内か

マルセイユにおける移住現象（1806-1911年）

らの移住者が、民間企業の事務員、警察官、税関吏、鉄道や港湾の職員などの小ブルジョワジーに、マルセイユ出身者よりも多くなる。そして、この小ブルジョワジーの増加は、家内奉公の需要を増大させ、女性移住者に女中としての職をさらに与えることになった³⁶⁾。

主にパリからの資本も導入しながら、より活発に行われるようになった、新港や帝国通りの建設などの大規模土木事業の影響のためか、1860年以降は外国からの移住も徐々に増え始める。ただし、1851-1871年の期間はまだ、イタリア人以外の外国人の数も重要であった（表6、表7）。とりわけ1861年に8,025人も数えたスペイン人は、イタリア人と同様に、工事現場の出稼ぎ労働者が多かったが、オレンジなどを扱う果物商人も古くから多数いたのである³⁷⁾。

1866年にはスイス人が1,748人にまで増加していたが、前世紀からマルセイユに居住する商人層に加えて、スイス人は事務員や特に会計士として雇われる傾向にあり、一般にイタリア人やスペイン人よりも高い社会的地位にあった。しかし、ドイツ人などと同じく、マルセイユの

表6 マルセイユのイタリア人人口の推移

調査年次	イタリア人人口（括弧内の数値は増加数）	増加率（％）	マルセイユの総人口	総人口に占めるイタリア人人口の割合（％）
1851	16,109		195,138	8.26
1861	20,667（4,558）	28.29	260,910	7.92
1866	29,649（8,982）	43.46	300,131	9.88
1872	38,536* ¹ （8,887）	29.97	312,864	12.32
1876	49,803（11,267）	29.24	318,868	15.62
1881	57,861（8,058）	16.18	357,530	16.18
1886	59,823（1,962）	3.39	375,378	15.94
1891	70,328（10,505）	17.56	403,749	17.42
1896	72,299（1,971）	2.80	442,239	16.35
1901	90,111（17,812）	24.63	491,161	18.35
1906	92,983（2,872）	3.19	517,478	17.97
1911	97,057（4,074）	4.38	550,619	17.63

*¹ 註49を参照。

イタリア人人口：1851-1886年：Mireur, op. cit., p.22; 1891-1911年：Paul Masson, dir., *Les Bouches-du-Rhône: Encyclopédie départementale, XIII, La Population*, Paris et Marseille, 1921, p. 181; マルセイユの総人口：表2より作成。

表7 外国人人口に占めるイタリア人人口の割合の推移（人、％）

調査年次	イタリア人人口	外国人人口	外国人人口に占めるイタリア人人口の割合
1851	16,109	18,778	85.79
1861	20,667	31,190	66.26
1866	29,649	37,332	79.42
1876	49,803	54,854	90.79
1881	57,861	66,271	87.35
1886	59,823	66,175	90.40
1901	90,111	98,835	91.17

外国人人口：1851-1876年：Joseph Mathieu, *Marseille: Statistique et histoire, Marseille*, 1879, pp. 25-27; 1881-1886年：Mireur, op. cit., pp. 16, 21; 1901年：Masson, op. cit., p. 185; イタリア人人口：表6より作成。

南部の裕福な諸地区で、女中として働く女性も多く見受けられた³⁸⁾。この時期に多様な外国人が増加した理由としては、大規模土木事業の影響の他にも、1860年以降フランスが自由貿易体制へと一時的に移行していたことも、その一つとして考えられるだろう³⁹⁾。

このように次第に外国人が増加し、より遠くのフランス国内の地域からも大勢の移住者がやって来ていた状況を、当時のマルセイユの人々はどのように感じていたのであろうか。現代フランスの歴史家ジェラルド・ノワリエルは、第三共和政期の初めの1870年代までは、社会問題を扱った文献や警察文書などで、外国人と他県出身のフランス人の混同が見られ、「外国人の住民は、フランス巡歴を行う職人組合の熟練労働者や、オーヴェルニュ地方出身者、アルプス山脈から下りてきた山間部の住民と同様に、庶民階級の一構成要素とみなされていた。⁴⁰⁾」と指摘している。実際に、当時のマルセイユの住民の証言をいくつか参考にしてみると、まだ出稼ぎ労働者も多かった「イタリア人⁴¹⁾」と、アルプス地方からの出稼ぎ労働者や移住者である「ガヴォ Gavots」は、確かに同じような扱いを受けていたようである。マルセイユ生まれの靴工であったフランソワ・マジュイ François Mazuy は、マルセイユの人たちが嫌がるような不健全な製造所においては、「すべての労働がガヴォやジェノワたちに任されていた。この二人種の移住者たちは、最も安い賃金で働くことにまだ大きな利益を見出していた⁴²⁾。」と述べている。又、同じくマルセイユ出身のシャンソニエ、ヴィクトール・ジュリュは、日曜日や祭日に時々する散歩中にこの上なく悲しくなった気持ちを、1857年にこう表している。「私の通りがかりに出会うのは、バシャンか、ピエモンテ、ガヴォ、オーヴェルニュ地方出身者、その他のいかがわしいフランシオ Franciots だけであった。…現在マルセイユに住む三十万人のうち、真のマルセイユ出身者はもう五万人としないであろう⁴³⁾。」

この第二帝政期までは、19世紀末に見られるような激しい「外国人嫌い xénophobie」の感情がイタリア人に対して向けられることは、どうやらなかった様子である⁴⁴⁾。むしろこの時期に注目すべき態度は、プロヴァンス語ではなく、自分たちに「強いられた」言語であるフランス語を話す、特に北部出身の移住者であるフランシオへの、マルセイユの人たちの用心深さと毛嫌いだろう。例えば、フランソワ・マジュイによれば、「北部出身の労働者がひどく不快なのは、マルセイユでは親密な人間関係が築くのが困難なこと⁴⁵⁾」であった。さらには、「マルセイユの女性であれば、フランシオの男性と結婚するのは身分の低い者と結婚すること⁴⁶⁾」だとまで思われていた。

表8を見てもわかるように、1861年から1872年の期間は、マルセイユのあるブーシュ＝デュ＝ローヌ県では、他県出身者の割合がかなり高くなっていった。しかし、第三の時期である1872-1911年には、近隣諸県の都市化に伴って、フランス国内からの移住は落ち着くことになる。すでに19世紀後半から増加傾向にあったコルシカ島からの移住者に加えて、アルプス山脈などの山岳地帯からの移住者は、この期間に最も増大はしていた。かつては出稼ぎ労働者で

マルセイユにおける移住現象（1806-1911年）

表8 各県の他県出身（出生）者の割合の推移（人口100人あたり：％）

調査県（括弧内は県庁所在地）	1861	1872	1881	1891	1901	1911
セーヌ県（パリ）	57.0	64.0	62.9	57.6	57.4	54.7
ローヌ県（リヨン）	28.0	30.4	35.3	35.0	38.3	38.5
ブーシュ＝デュ＝ローヌ県（マルセイユ）	18.0	29.7	29.3	28.2	30.1	30.5
アルプ＝マリタイム県（ニース）	4.5	6.1	8.0	14.2	22.0	28.9
ヴァール県（トゥーロン）	15.5	21.8	22.4	19.0	26.6	27.6
エロー県（モンペリエ）	11.0	13.3	17.0	19.8	27.3	26.5
ヴォークリューズ県（アヴィニョン）	10.0	12.6	11.7	11.0	19.4	21.9
全 国	11.8	15.0	15.0	16.8	19.6	21.0

recensement de 1911, t. 1-2^e partie, p. 66. より作成。

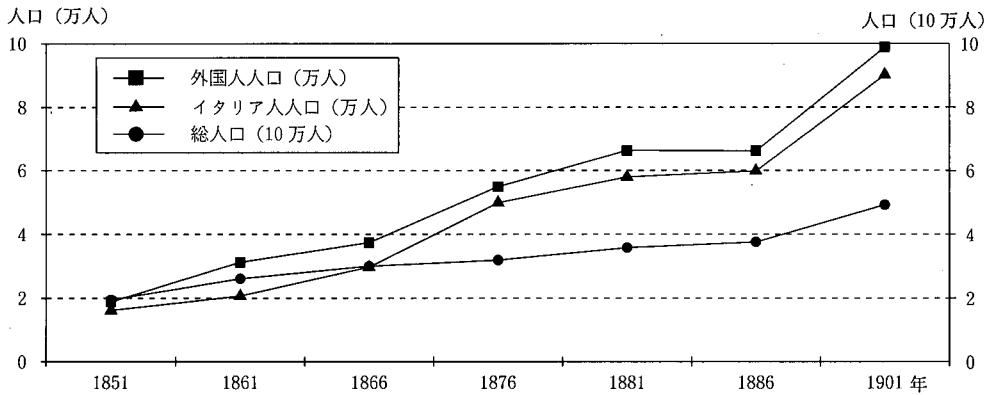


表6, 表7より作成。

図5 マルセイユの総人口と外国人人口・イタリア人人口の推移（1851-1901年）

あった移住者も、時代が進むに連れてマルセイユに定住するようになり、アルプス地方の女性などは男性よりも多く、徐々に故郷を離れていった。それでも、フランス国内からの移住者の割合が停滞したのは、近隣諸県からの移住の流れがほとんど増さず、それに代わって外国からの移住（移民）が大幅に増加したからであった⁴⁷⁾(図5)。こうした外国人の急激な増加を目の当たりにした、マルセイユの統計学者ジョゼフ・マチウ Joseph Mathieu は、「1866年に外国人の数は37,332人にも達していたが、現在（1876年）は54,854人である。…もしこのまま外国人の数が増え続ければ、マルセイユの人口の特徴をやがて根底から変えかねないだろう⁴⁸⁾。」と不安げに将来を案じていたが、その後はまさに彼の予想通りの結果となる。

表6と表7を再び参考してみると、1880年代と1890年代の初頭以外は、外国、特にイタリアからの移住が著しく増加しているのがわかる。1901年には、マルセイユの総人口に占めるイタリア人の割合が18%と頂点に達し、外国人人口に占める割合も91%にまで上っていた⁴⁹⁾。フランスでは1889年の法により、フランスで生まれた外国人の子供は自動的に任意で、フランス国民に帰化されていた。在マルセイユ・イタリア領事館の副領事であったロッシは、「…国勢調査によって提示された外国人の数というのは、外国で生まれた外国人と帰化してい

ない外国人だけをほぼ表しているのに過ぎないのである。ところが、フランス生まれの人〔外国人の子供—引用者、以下同様〕はほとんど、〔自らの申請による〕帰化者と共に、フランス国民の数を増加させるようになってきている⁵⁰⁾。」と、この法の影響を説明している。したがって、総人口に占めるイタリア人の割合が18%であったのは全く驚くべきことで、当時はマルセイユにいる五人に一人がイタリア国籍の人であったという計算にもなる。

このように大量に移住してきたイタリア人たちは、マルセイユの労働力不足を懸念する経済界の人たちには、おおむね歓迎されていたようである。ブーシュ＝デュ＝ローヌ県貯蓄金庫の理事長であったウジェーヌ・ロスタン Eugène Rostand は、移民 immigration に関する論稿で、「他のヨーロッパの人たちを、フランスへと引き寄せてくる動きに逆らわないで、この動きを警戒して観察しながら、我々の利益になるように仕向けさせよう⁵¹⁾。」と述べていた。さらに、自由経済主義の意見の表明の場であった『経済学者雑誌』においては、フランソワ・ベルナル François Bernard が、「単に国家的な視点から考えれば、マルセイユやフランスの他の場所へのイタリアからの移民は、好都合なもののみならずことができる。それは、イタリアからの移民が、フランスの学校で教育された、フランス以外の祖国を知らない、大変多くのフランス国民の世代を将来に約束させるからである⁵²⁾。」と、積極的に移民を受け入れるように勧めていた。

しかし、こうしたイタリア移民に好意的な人たちにさえ、イタリア人の気に掛かる性向があった。ロstanは、「ここマルセイユでは、イタリア人たちによって犯された人身に対する犯罪を、新聞や雑誌が絶えず書きとめている⁵³⁾。」と述べ、ベルナルも「…仕事場での競争は別として、フランス人労働者はイタリア人にとっても寛容な態度を示しているが、彼らとはほとんど付き合おうとせず、彼らの問題にもかかわりたがらない。それでも、イタリア人は暴力的な性格なので、フランス人労働者が彼らを避けても仕方がない⁵⁴⁾。」と指摘していた。ごく少数のイタリア人たちによるナイフを使った暴力犯罪が目立ち、集団で犯罪を行う傾向にもあったので、マルセイユの一般住民たちも、彼らに非常に不安感を抱いていた⁵⁵⁾。この当時はまだ、イタリア人による犯罪の増加の原因としては、彼らの不安定な、より低い社会的地位を考慮せずに、大部分がイタリア人であった外国人の急激な増加だけが問題にされやすかった。1921年になってさえも、マルセイユ市立図書館の元館長であったバレ H. Barréなどは、「大勢の外国人が押し寄せて来たことと過度の産業化」が犯罪の原因であると考えていた⁵⁶⁾。

イタリア人と最も接する機会の多かったフランス人労働者は、特に不況時に、普段は自分たちが嫌がる、きつく危険な仕事を行ってくれる移民労働者を敵視した。フランス人労働者よりも、日給で0.5から1フランぐらい安く働くイタリア人労働者を、雇用主は益々求めるようになり、フランス人労働者は失業や賃金の低下を恐れた⁵⁷⁾。そして、フランスによるチュニジアの保護国化で、両国間の政治的な緊張が高まった1881年が、マルセイユのフランス人労働者

とイタリア人労働者の関係が最も悪化した時期だと言われ、3名の死亡者と21名の負傷者を出す惨事となった「マルセイユの晩課事件」が6月に起こった⁵⁹⁾。1881年以降にイタリア人の数が停滞気味になるのは、この事件の影響も考えられるが、むしろ事件を引き起こす背景となっていた経済状況に主な原因があった。フランスは1880年代に再び保護貿易主義に回帰しており、マルセイユの港は活動が鈍り不況に陥っていたのであった⁵⁹⁾。

イタリア人がより安い賃金で働くこと以外にも、フランス人労働者が不満を抱く要因が他にもいくつかあった。1880年から兵役がフランス国民に義務化されていたが、外国人は受入れ国の防衛に参加することなく職業に従事していたので、労働市場での平等が保たれていない状態にあった。そこでフランス政府は、フランス人に労働市場での平等を保障し、しかも、増加する外国人の管理や、将来にわたる労働力人口の確保、軍人たちに望まれていた強力な軍隊の再編成にもなる、1889年の国籍法を制定したのであった⁶⁰⁾。10年後の1899年には、労働市場での外国人の制限の要求に応えるため、社会改良主義者のミルラン Millerand の政令により、国家や県、市町村 communes などの公共土木事業の請負で雇われる外国人労働者の割合が、地域や事業の性格によって最大5%から30%に定められた。しかし、この措置の効果はほとんどなく、その後もイタリア人労働者などは公共土木事業に多く雇われ続けたのである⁶¹⁾。

実際、フランス政府も移民の流入が止むのを望んではおらず、産業の労働力不足をより気に掛けていた。外国人労働者の受入れと労働の条件が悪くならないように、例えば雇用主に労災の責任と補償義務を定めた1898年の労災補償法などでは、外国人労働者にもフランス人労働者とはほぼ同じ賠償の条件が認められていた⁶²⁾。又、フランスの外国人は、公立小学校での無料の学校教育や、生活保護 Assistance publique を受けることもできていた。だが、フランスの生活保護を頼りにする外国人が増え過ぎたために、行政当局もフランス人の一般住民も懸念する事態となっていた⁶³⁾。

本節の最後に、この生活保護の問題に関しては、在マルセイユ・イタリア領事館の副領事のロッシが報告で採り上げた一例を参考にしてみたい。フランスの市町村では、1851年の法の施行により、ベッドに空きがあり、フランス人の患者に必要ななければ、市町村立の病院は外国人を無料で入院させる決まりになっていた。1900年には、マルセイユの市立病院 Hôtel-Dieu とコンセプション病院 Hôpital de la Conception の産科を除く年間の入院患者数 10,582人のうちイタリア人の患者は2,659人（25%）で、産科は年間の入院患者数 974人のうち198人（20%）がイタリア人女性の患者であった。「病院当局によって行われた諸調査によると、病院の患者の平均の入院期間は30日で、毎日の平均の費用は2.50リラとなり、マルセイユのイタリア人へ施された無料の治療のための支出は、約14万フランという年間の総額⁶⁴⁾」にまで達していた。しかし、副領事のロッシは、「これは確かにかなりの額であるが、私たちイタリア人の労働がフランスにもたらす、計り知れない経済的利益を考えれば、法外であるとは考

えることができない⁶⁵⁾。」と、マルセイユの一般住民がどれほど感じてくれていたのかわからない、イタリア人のマルセイユ、そしてフランスでの社会的貢献を強調するのであった。

(2) 港湾都市マルセイユの人口吸引力

これまで利用してきた国勢調査などの統計資料は、主に居住人口を対象にしたものであった。港湾都市マルセイユには、すでに幾度か検討してきた出稼ぎ労働者の他にも、マルセイユに一時滞在してリヨンやパリに鉄道で向かうイタリア人や、アメリカ大陸などの諸国にマルセイユの港から船で出国するイタリア人たちも多数いたようであった⁶⁶⁾。そこで、統計数値にはかなりの過少推計があると考えられるが、マルセイユの港から出国したイタリア人に関してのみ、マルセイユの人口吸引力の特徴の一つとして簡単に補足をおきたい。

統計年鑑によれば、1857-1893年の間に、約130万人がフランスの港から出国したが、そのうち24万人がフランス人で、106万人が外国人であった。この外国人の出国者の中では、イタリア人が47万人と最も多く、次いでドイツ人が18万人、スイス人が17万人を数えていた⁶⁷⁾。より詳しく表9から、1889-1894年の期間にフランスの港から出国したイタリア人の数を見てみると、マルセイユからの出国者数は余り多くはなく、減少傾向にさえある。しかし、イタリアの港からやって来て、マルセイユの港に一時的に寄港し、アメリカ大陸などに出国するイタリア人は相当な数に上った⁶⁸⁾(表10)。マルセイユの港から出国したこのイタリア人たちが、どのようなイタリアの、あるいはフランスの海運会社の蒸気船を利用したのかについては明らかにされていない。それでも、マルセイユでは1881年に、マルセイユとニューヨーク間の航路がファール社 Compagnie Fabre によって設けられ、20世紀初頭にはラテンアメリカ行きの航路が、フランスとイタリアの海運会社により競われ発展していたのである⁶⁹⁾。

表9 フランスの港におけるイタリア人の出国の動向(人)

	ボルドー	ルアーヴル	マルセイユ	ブローニュ
1889	1,233	9,414	6,986	—
1890	1,126	12,854	4,254	—
1891	594	13,796	2,580	—
1892	345	8,119	1,721	1,763
1893	456	6,584	1,870	1,408
1894	275	4,306	1,916	124

G. Yver, "Émigration italienne", *Annales de géographie*, no. 26, 1897, p. 132. より作成。

表10 マルセイユに一時寄港したイタリア人の出国の動向(人)

1889	1890	1891
9,456	8,685	11,669

Ibid., p. 132. より作成。

国内移住から移民へと主要な移住の流れが変化した、19世紀から20世紀初頭にかけてのマルセイユの移住現象を、統計資料を用いながら本章では考察してきた。又、移住という現象が、当時のマルセイユの人々にどのように捉えられていたのかについても、幾人かの証言を参考に検討を試みてみた。次章では初めに、マルセイユの移住現象で重要であったイタリア人の特徴を人口学的にまとめる。次に、1901年の国勢調査の統計結果を基にして、移住者の地理的分布と就業状態もイタリア人を中心にしながら考察を加えていきたい。

第3章 移住者の地理的分布と就業状態

(1) マルセイユのイタリア人の特徴

マルセイユのイタリア人の特徴に関しては、歴史家ピエール・ミルザなどの研究を参考に整理してみると、フランス全体のイタリア人に比べて、マルセイユのイタリア人は大部分が北部出身ではあったが、南部（特にナポリ）や中部出身者の割合もより高かったことがまず指摘できる。女性の数も多く、より早めの定住化の傾向が見受けられ、1886年には男性が34,508人で女性は25,315人であったが、1911年には男性が50,583人で女性が46,474人となり、かなり男女差が縮まっていた⁷⁰⁾。この定住化の傾向と原因については、1903年に副領事のロッシが次のように説明していた。「…マルセイユ管区におけるイタリア人による移民は、初めは一時的なものに過ぎなかったのであるが、時が経つに連れて、一部は永続的な特徴をもつようになっている。それは、安定した職業を手に入れるために努力し、少しずつ環境に慣れてきたイタリア人たちには、母国では同じような報酬のある仕事は見つけられず、古くてより快適ではない生活習慣には再び馴染めないであろうという思いがあり、帰国するよりはむしろ、外国に留まることを好んだからであった⁷¹⁾。」

マルセイユの経済発展の他に、イタリア人を多く引き付けた要因としては、地理的、文化的な近さや、古くからの人的交流なども考えられるが、イタリア自体の状況も重要であった。イタリアの人口は、1871年から1914年の間に、2600万人から3650万人へと増加し、人口過密となり農業恐慌も経験していた⁷²⁾。極めて限られた期間内での分析ではあるが、表11が示すように、イタリアの出生率は、フランスやマルセイユに比べて実際かなり高かった。こうした高い出生力は、少なくともこの時期は移民を通じて、マルセイユにある程度持ち込まれていた。表12のマルセイユのイタリア人の出生数と死亡数は、イタリア人の老人の帰国や、祖国イタリアでの出産などの影響も考慮すべきではあるが、それでも、コレラが流行した1884年以外は、イタリア人がマルセイユの人口増加に寄与していたと言えるであろう⁷³⁾。マルセイユの統計学者ジョゼフ・マチウも、今度は不安感からではなく、まるで頼もしげに、「イタリア人の居住者たちはこのマルセイユに、よりますます深く根づくようになっていく⁷⁴⁾。」と、マルセイユのイタリア人たちの人口的、さらには社会的な重要性を認識するまでになっていた。

表 11 1882-1884 年間の出生率と死亡率 (%)

	イタリア		フランス		マルセイユ	
	出生率	死亡率	出生率	死亡率	出生率	死亡率
1882	37.2	27.6	24.8	22.2	28.4	30.2
1883	37.2	27.6	24.8	22.2	29.4	31.0
1884	39.0	26.9	24.7	22.6	29.2	33.9

イタリアとフランス：B. R. Mitchell, *European Historical Statistics, 1750-1975*, 2nd revised ed., London, 1981, pp. 119-120. マルセイユ：Mireur, op. cit., p. 343. より作成。

表 12 1882-1884 年間の出生数と死亡数 (マルセイユ全体とイタリア人のみの比較) (人)

	マルセイユ全体		マルセイユのイタリア人	
	出生数	死亡数	出生数	死亡数
1882	10,256	10,915	1,904	935
1883	10,758	11,390	2,270	945
1884	10,778	12,500	1,850	1,240

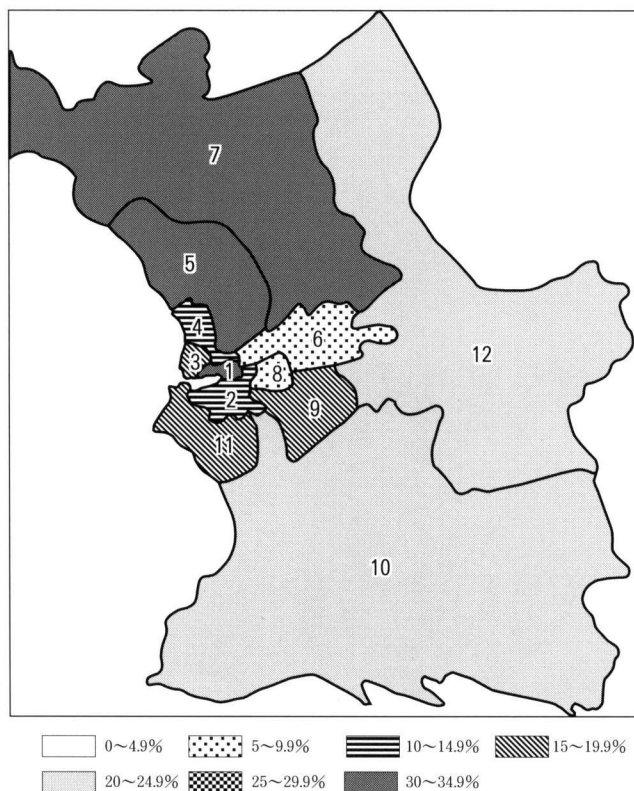
マルセイユ全体：Mireur, op. cit., p. 341; イタリア人：Joseph Mathieu, "Les Italiens à Marseille", *Annales administratives et statistiques des Bouches-du-Rhône*, 1884-85, p. 218. より作成。

(2) 移住者の地理的分布と都市改造の影響

マルセイユという都市で、移住者がどのように居住していたのかを知るために、本稿では約 91%がイタリア人であった 1901 年の外国人の地理的分布のみを、地図を用いて確認していきたい。1901 年の外国人の分布を表す図 6 と表 13 をまず見ると、都市北部の 7 区と 5 区や、旧港の北側の 1 区に外国人が集中しているのが確かめられる。歴史家シーウェルが分析した 1851 年の人口調査原簿の結果⁷⁰⁾では、ほぼ 1 区に該当する旧港の北側は、外国人の割合がすでに 20%近くにまで達していた。しかし、その後 50 年間で外国人の集中の度合いが 31.7%とさらに高まっている。又、表面積を考えれば、この旧港の北側は外国人が非常に多く感じられたであろう。1851 年の時点では、5 区と 7 区におよそ該当する都市北部の諸地区などは、外国人の割合がわずか 5%以下でしかなかった。1901 年に都市北部の外国人の割合が 30%以上にまで上昇したのは、19 世紀に行われた都市改造が、外国人の移住者の居住傾向に大きな影響を及ぼしていたからであった。

19 世紀マルセイユの都市改造に関しては、図 7 の都市地図を使って説明してみると、旧港 Vieux Port あるいはその右側の、マルセイユの目抜き通りであるカンヌビエール通り Rue Canebière より上の都市の北部地帯が何よりも重要となる。地図上の F の 2 にあるサン＝シャルル駅 Gare Saint-Charles は 1848 年の 1 月に落成し、この駅と支線で結ばれていた B の 1 から 3 付近が新港となり、ジョリエット停泊区 Bassin de la Joliette は 1853 年に完成した。新たに三つの停泊区の建設をめざして、1856 年以降さらに北に延長された新港の周りには、港湾倉庫や港湾駅、新たな街区や工場が建設され、19 世紀後半からはこの工業中心地帯に多く

マルセイユにおける移住現象（1806-1911年）



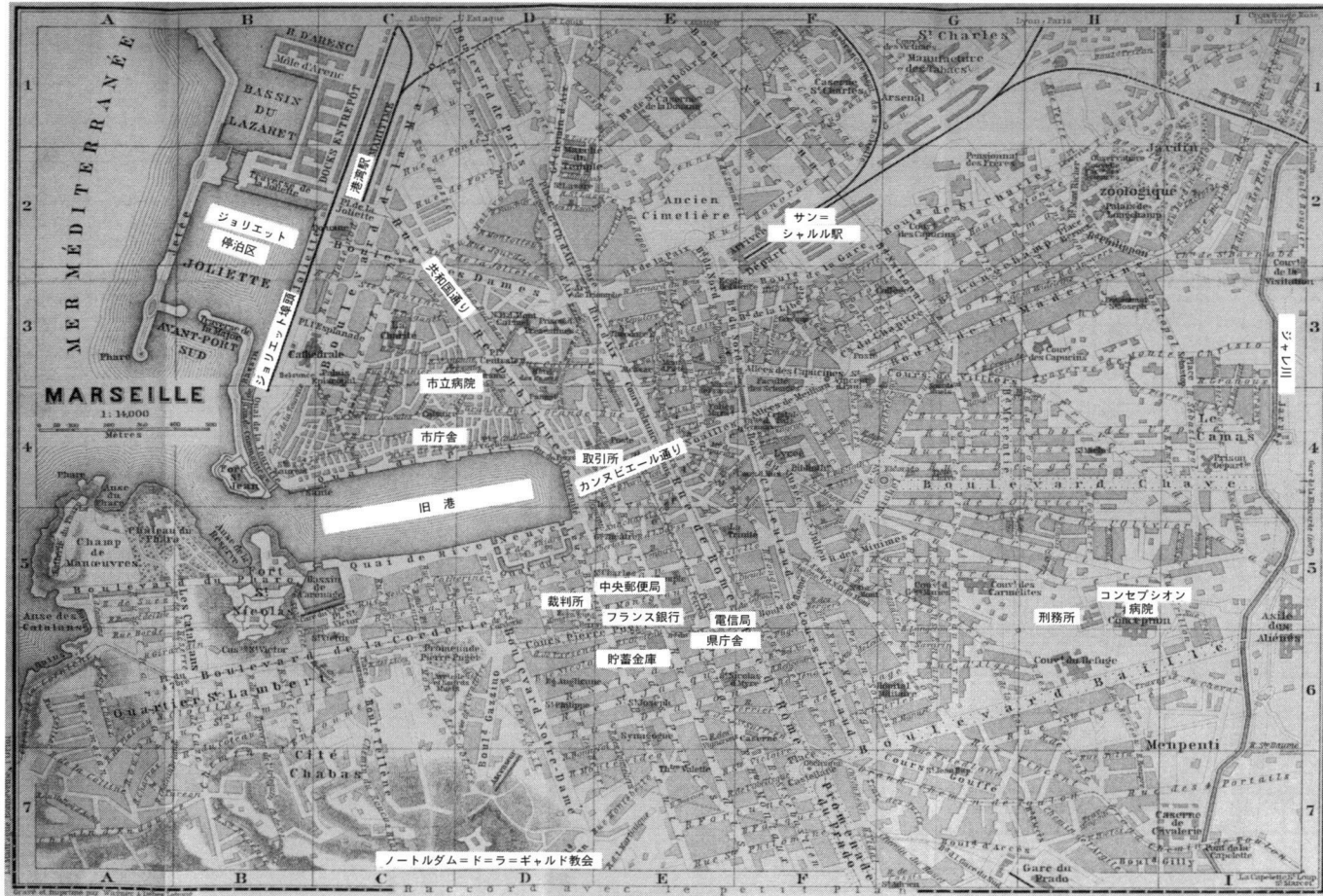
Jean-Luc Pinol, dir., *Atlas historique des villes de France*, Barcelona, 1996, p. 195. の地図, Gaston Rambert, Marseille, *La formation d'une grande cité moderne*, Marseille, 1934, p. 453. の調査区, 表 13 の数値より作成。

図 6 1901 年の外国人の分布

表 13 1901 年の外国人の分布（人，％）

調査区 (Cantons)	外国人	総人口	外国人の割合	順位
1er	13,672	43,063	31.7	2
2e	7,202	70,189	10.3	10
3e	5,539	28,821	19.2	7
4e	5,032	37,514	13.4	9
5e	20,882	67,846	30.8	3
6e	3,726	43,583	8.5	11
7e	15,363	44,235	34.7	1
8e	2,407	33,079	7.3	12
9e	6,542	34,616	18.9	8
10e	8,733	39,284	22.2	4
11e	6,836	34,954	19.6	6
12e	2,901	13,977	20.8	5
合計	98,835	491,161	20.1	

外国人：Masson, *La Population*, p. 185; 総人口：Ministère de l'Intérieur, *Dénombrement de la population, 1901*, Paris, 1902, p. 154. より作成。



Karl Baedeker, *South-Eastern France from the Loire to the Riviera and the Italian Frontier including Corsica: Handbook for Travellers*, 2nd ed., Leipzig and London, 1895, p. 210. より作成。

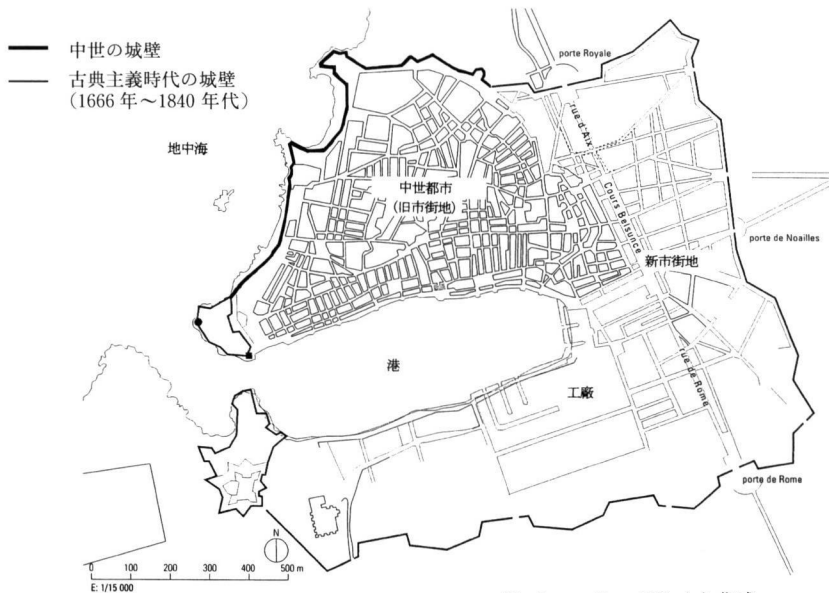
図7 19世紀末のマarseイユ

の移住者が引き寄せられて来た⁷⁶⁾ (図8)。新港と旧港を結び付ける目的で建設された共和国通り Rue de la République, 完成した時の帝国通り Rue Impériale も、旧市街の一部を取り壊して、1862-1864年の間に驚くべき速さで建設されていた。19世紀以前の簡単な都市地図である図9と見比べると、19世紀に都市の北部がいかに変貌を遂げたのかが明らかである。



Renée Lopez et Emile Temime, *Histoire des migrations à Marseille, II: L'expansion marseillaise et l'invasion italienne* (1830-1918), Aix-en-Provence, 1990, pp. 32-33.

図8 新港とマルセイユ船渠・倉庫会社の諸施設



Pinol, op. cit., p. 180. より作成。

図9 19世紀以前のマルセイユ：城壁の変化

新港沿いの工業中心地帯の他にも、中心部の旧港の北側には外国人が相当に集中していた。そこで、この旧市街に建設された帝国通りの状況についても、若干の説明を付け加えておきたい。帝国通り沿いには、当初はブルジョワ向けの高級アパートマンが建設されたが、裕福な住民たちは、都市の南側に住み続けることを好み、帝国通りの不動産投資は失敗に終わっていた⁷⁷⁾。帝国通りの建設では、旧市街の一部しか取り壊されなかった。残りの大部分の旧市街には、低家賃の住宅に庶民たちが居住し続けており、そしてその周囲の庶民的な雰囲気も、帝国通りにも徐々に浸透していった⁷⁸⁾。帝国通りの建設後も、旧市街は結局、労働者や漁師、一時滞在者、つましい手工業者たちの領域のままであり、さらには、老朽化した住宅の家賃に引かれて、より多くの外国人が集まって来てくれたのであった⁷⁹⁾。

(3) 移住者の就業状態と居住傾向

移住者、特にイタリア人が大部分を占めた外国人の地理的分布は確認できたので、本節では就業状態との関連で移住者の居住傾向を把握したい。ここでは、1901年の国勢調査におけるプーシュ＝デュ＝ローヌ県の統計結果⁸⁰⁾を用いて検討する。フランス人と外国人の比較をしながら、表14から男女別に労働力人口を分析してみると、アンダーラインが引かれた雇用者内の失業率において、外国人の失業率は決して高くなく、男女とも工業部門が最も高い失業率に

表14 国籍、産業・従業上の地位別労働力人口（1901年の国勢調査：プーシュ＝デュ＝ローヌ県）

	農林漁業			工業 ^{*2}			商業			奉公サービス			自由業 ^{*3}		
	雇主	雇用者 ^{*1}	独立就業者	雇主	雇用者	独立就業者	雇主	雇用者	独立就業者	雇主	雇用者	独立就業者	雇主	雇用者	独立就業者
フランス人	8,869	13,183	19,334	8,615	77,071	9,033	6,898	18,337	8,705		1,988		575	23,720	2,237
男性 ^{**4}	262 (2.0%)			6,001 (7.2%)			1,062 (5.5%)			27 (1.3%)			95 (0.4%)		
外国人	369	1,736	1,175	1,100	27,937	2,831	1,171	3,357	1,423		311		10	299	238
男性 ^{**5}	61 (3.4%)			2,035 (6.8%)			132 (3.8%)			11 (3.5%)			15 (5.0%)		
男性の総数	9,236	14,919	20,509	9,715	105,008	11,864	8,069	21,694	10,128		2,299		585	24,019	2,475
	323 (2.1%)			8,036 (7.1%)			1,194 (5.2%)			38 (1.7%)			110 (0.5%)		
フランス人	2,431	1,483	928	2,882	22,585	16,964	4,135	3,870	5,535		15,590		284	4,351	1,269
女性	13 (0.9%)			1,407 (5.9%)			190 (4.7%)			314 (2.0%)			76 (1.7%)		
外国人	189	235	118	245	7,007	1,740	704	877	674		4,817		6	287	145
女性	9 (3.7%)			348 (4.7%)			25 (2.8%)			107 (2.2%)			11 (3.7%)		
女性の総数	2,620	1,718	1,046	3,127	29,592	18,704	4,839	4,747	6,209		20,407		290	4,638	1,414
	22 (1.3%)			1,755 (5.6%)			215 (4.5%)			421 (2.0%)			87 (1.8%)		

^{*1} 雇主に有給で雇用される雇用者だけが、就業者か失業者に分類されている。上段の数値は就業者、下段の数値は失業者であり、括弧内の割合は雇用者内のみの失業率を示す。失業者とは通常は事業所に雇用されて働いているが、調査時に一時的に失業中であつたもの。

^{*2} 採掘業、加工業、運輸業、倉庫業が含まれ、厳密な意味での「工業」とはかなり異なる。それでも、加工業が最も多数となっている。

^{*3} 公務員も含まれる。ただし、国営工場の従業員は、工業の部門に含まれる。

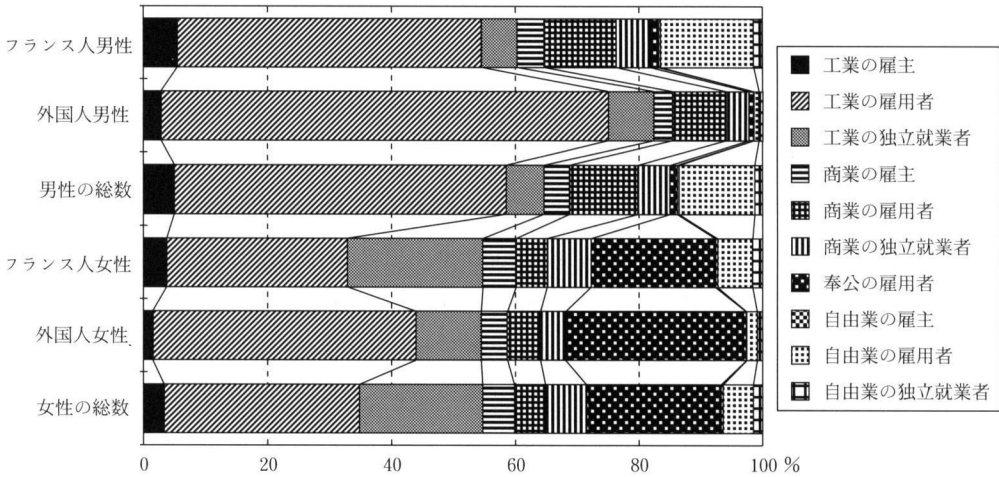
^{*4} フランス人には、自県内出身（出生：以下同様）者、他県出身者、外国出身者、出身地不詳者、帰化人を含める。

^{*5} 外国人には、外国出身者、フランス出身者、出身地不詳者を含める。この外国人とフランス人を合計した数値が総数となる。

* 分類不能の1,284人は表作成の対象外とした。

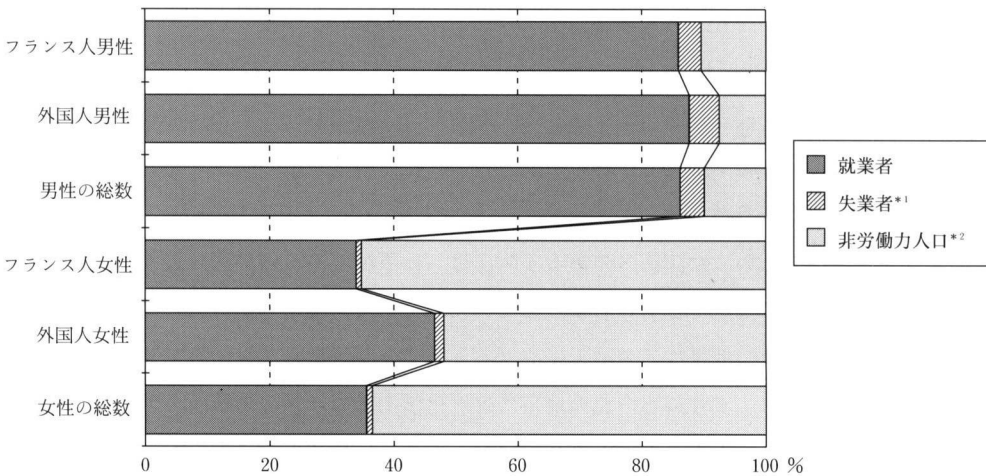
recensement de 1901, t.1, pp. XVII-XVIII; t.2-2^e partie, pp. 642-643, 652-653, 657-680. より作成。

マルセイユにおける移住現象（1806-1911年）



*1 就業者割合には農林漁業を除いた各種産業の雇主、雇用者内の就業者、独立就業者が含まれる。
recensement de 1901, t. 2-2^e partie, pp. 652-653. より作成。

図10 国籍・産業・従業上の地位別就業者割合*1 (1901年のプーシュ＝デュ＝ローヌ県)



*1 雇用者内の失業者のみ。 *2 15歳以上人口から労働力人口を差し引いた人口。
recensement de 1901, t. 2-2^e partie, pp. 642-643, 652-653. より作成。

図11 国籍別労働力と非労働力 (15歳以上人口) (1901年のプーシュ＝デュ＝ローヌ県)

なっているのが確かめられる⁸¹⁾。農林漁業を除いた就業者の割合を表す図10からは、男性では工業の雇用者が、女性では奉公職も重要であるのが確認できる。図からは把握できないが、スイス人とドイツ人の女性は、就業者の50%以上が主に女中となっていた。外国人の就業者に、工業の雇用者の割合が男女ともより高いのは、イタリア人男性が75.6%、イタリア人女性が45.3%と高い割合を示していたからであった。

図11では、労働力人口と非労働力人口との比較から就業状態を分析すると、外国人の就業者の割合がより高い。イタリア人男性のみでは91.0%と極めて高い割合になり、イタリア人女

性も47.2%であった。よって、いかに多くのイタリア人、特にイタリア人男性が、就労目的でブーシュ＝デュ＝ローヌ県やマルセイユにやって来ていたのかわかるであろう。又、外国人男性の失業者の割合が4.9%と高く、イタリア人男性では5.1%と最も高い割合になるのは、失業率の高い工業の部門に、イタリア人男性が集中していたのが原因であった。

20世紀初頭の経済地理学者ポール・マッソン Paul Masson は、路面電車がかなり普及した1921年においても、イタリア人の労働者たちは雇われた工場の出来るだけ近くに住むことを望んでいたと指摘していた⁸²⁾。少なくとも本稿が対象としている期間では、イタリア人はより仕事場に近い所に居住していたと考えられるだろう。そこで最後に、イタリア人の居住傾向を、図6の調査区を再び参照しながら、すでに把握できた就業状態との関連でまとめておきたい。1区と3区に該当する、旧港の北側にある旧市街は、イタリア人が最も多く集まる場所の一つで、漁業を営むことが多かったナポリからの移民が目立っていた。ナポリの漁師たちは、初めは漁期ごとにマルセイユにやって来ていたが、徐々に家族を伴って定着するようになる。かつては豪華な邸宅であった場合もある、荒廃した古い家屋の限られた空間しかない各部屋に、イタリア人の家族全員や、五、六人の独身者たちが、埋め込まれて暮らしていた。「小ナポリ Petit Naples」とまで呼ばれていたこれらの地区では、食料品店や衣料品店、理髪店、金物屋、カフェ、菓屋などの、様々な商店がイタリア人たちによって開かれていた。その他にも、イタリア人によるあらゆる職業が見受けられたが、特に、靴屋や仕立屋、帽子製造業者、指物師、石工などの手工業者が多数であった⁸³⁾。

ラザレヤアランクといった諸街区のある4区には、仕事場である停泊区の近くにいることを好んだ、イタリア人の港湾労働者たちが住んでいた。そして、都市の北部に位置する5区や7区では、都心により近い地帯に、搾油工場や(ろうそくの原料である)ステアリン製造工場、石鹼工場などがあった。より遠くの北の地帯には、化学工場や砂糖の精製所、瓦工場、製粉所などがあり、多くの移民労働者を引き寄せていた。とりわけ搾油工場や製粉所、瓦工場などでは、1911年にそれぞれ5,000人近くものイタリア人が、労働者として雇われていた。そして、石鹼工場では約2,000人、製粉所では約1,800人のイタリア人が、同じく1911年に働いていた。仕事がよりきつくない、砂糖の精製所やステアリン工場では、女性が多く雇われる傾向にあったようである⁸⁴⁾。

9～11区の南部や南東部の諸地区でも、より少数のイタリア人の労働者が、まだ住み続けてはいた⁸⁵⁾。しかし、これらの諸地区では、極めて限られた人数ながらも、イタリア人社会で影響力のある実業家たちも居住しており、ブルジョワが多く住む諸地区などでは、女中として雇われるイタリア人の女性も多く見られた⁸⁶⁾。このようにマルセイユのイタリア人たちは、工場労働者が圧倒的に多数であったとはいえ、その他にも様々なあらゆる職業に従事しながら、マルセイユで都市生活を営んでいたのがあった。

おわりに

国勢調査などの統計資料に基づきながら、19世紀初頭から20世紀にかけてのマルセイユの移住の長期変動を明らかにすることが、本稿が設定した大きな課題であった。統計分析の結果からは、第二帝政期に該当する1851-1871年の期間には国内移住が顕著で、この期間に増加しつつあった外国からの移住、移民が次の1872-1911年の間に重要となっていたことが判明した。本稿が対象とした期間内に、常に国内移住も移民も同時に見受けられたのは確かであるが、しかし、主要な移住の流れは、19世紀から20世紀初頭の間には国内移住から移民へと推移していたのである。

当時のマルセイユの住民たちの、いくつかの証言からも、第二帝政期における外国からの移住者は、国内移住者と同じような扱いを受けており、むしろ、この時期に増加したフランシオと呼ばれた、プロヴァンス語でなくフランス語を日常的に話す移住者に対する用心深さと毛嫌いが、幾人かのマルセイユの人々には感じられた。第三共和政期の1872-1911年には、統計数値でマルセイユの人口変動を客観的に見ていた統計学者は、移民の社会的重要性を痛感するようになり、労働力不足を懸念していた経済界の人たちは、「警戒して観察しながら」移民を受け入れるように勧めていた。一般住民の感情については本稿では十分に展開することができなかったが、不況時の19世紀末には、特にフランス人労働者などは、より安い賃金で働く移民労働者のイタリア人に敵意を抱く場合もあったと考えられる。又、出生率の低下の問題や、増加する外国人の管理の問題に、当時のフランス政府がどのような措置を講じたのかに関しても、1889年の国籍法の意義を問いながら検討してきた。この1872-1911年の期間は、とりわけ外国人が多数いたマルセイユでは、あらゆる階層の人々がかつてなく「移民」を意識せざるを得なくなっており、その後も多くの移民労働者を受け入れ続けるフランス社会での、まさしく「移民」の時代の幕開けを港湾都市マルセイユの人々は体験していたと言えるだろう⁸⁷⁾。

移住者の数量的動向を把握した後は、都市における移住者、本稿ではイタリア人が大部分を占めた1901年の外国人の地理的分布を確認し、移住者の居住傾向が都市改造や就業状態と如何に密接に関わっていたのかを、都市地図などを用いながら概観してきた。19世紀の後半以降、都市の北部に建設された新港沿いには、工業中心地帯が発展し多くの移民労働者を引き寄せていた。かつてより外国人が多数いた旧港の北側の旧市街も、1864年の帝国通りの建設後に、さらに外国人が集中するようになっていた。そして、外国人人口の約91%を占めていたイタリア人は、工場労働者が圧倒的に多数ではあったが、都市固有の多様な労働力需要を満たすために、その他にも様々な職業にマルセイユで従事していたのであった。

1901年の国勢調査にもなると、移住者、特に外国人の地理的分布と就業状態を簡潔に知ることが可能となっていた。これは統計技術の発達や、統計への関心の高まりなどの理由に加え

て、統計学者や国勢調査を刊行する国家が、国籍の調査事項が初めて導入された 1851 年よりもはるかに、外国人人口に注意を払うようになっていた結果であると考えられる⁸⁸⁾。本稿では、この国勢調査などのマクロな統計資料を分析して、移住現象の長期的な動向は具体的に把握できたのだが、マルセイユに暮らしていた移住者たちの姿を、詳細に描き出すことは出来なかった。今後は本稿での分析を基礎にして、すでいくつかの研究が行っているように、マルセイユの特定の街区や職業などに焦点を絞りながら、ミクロな視点に基づいた研究も行っていく必要があるであろう⁸⁹⁾。

註

- 1) Leslie Page Moch, *Moving Europeans: Migration in Western Europe since 1650*, Bloomington, 1992, pp. 108-109; B. R. Mitchell, *European Historical Statistics, 1750-1975*, 2nd revised ed., London, 1981, pp. 30, 34-37. 数値は Mitchell を参照した。イギリス（イングランド、ウェールズ、スコットランド）とフランスは 1801-1911 年の期間、ドイツのみ 1816-1910 年の期間で、アルザスとロレーヌの大部分はドイツの 1910 年の数値に含まれる。各国の 1850 年と 1911 年の出生率と死亡率（人口千人あたりの比率）は以下の通りであった。括弧内は出生率、死亡率の順で、1850 年フランス (26.8‰ : 21.4‰)、ドイツ (37.2‰ : 25.6‰)、イギリス（イングランド、ウェールズ）(33.4‰ : 20.8‰)、1911 年フランス (18.7‰ : 19.6‰)、ドイツ (28.6‰ : 17.3‰)、イギリス (24.3‰ : 14.6‰)。Mitchell, op. cit., pp. 119, 123, 125-126, 130, 135-136.
- 2) Philip E. Ogden and Paul E. White, "Migration in later nineteenth-and twentieth-century France: the social and economic context", in P. E. Ogden and P. E. White eds., *Migrants in Modern France: Population Mobility in the Later Nineteenth and Twentieth Centuries*, London, 1989, p. 7.
- 3) ただし、フランスの都市人口は二千人以上の集住地である。Jacques Dupâquier, dir., *Histoire de la population française, III, de 1789 à 1914*, Paris, 1988, pp. 129, 131.
- 4) Ibid., p. 132.
- 5) P. E. White, "Internal migration in the nineteenth and twentieth centuries", in Ogden and White eds., pp. 22-23; 遠藤輝明「フランス・レジオナリズムの歴史的位相一人と地域と国家をめぐる相関の変遷」遠藤輝明編『地域と国家—フランス・レジオナリズムの研究』日本経済評論社, 1992 年, 29-37 頁。なお、図 2-A は厳密には都市への移住ではなく、出生地県から他県への移住を表している。実際に 1911 年の国勢調査で確認すると、この図にはいくつかの誤りが見受けられたが、国内移住の大まかな特徴は把握できるので、このまま修正を加えずに利用した。この点は註 47 で再び触れることにする。
- 6) White, op. cit., pp. 23-24. マルセイユ、リヨンと比較した場合のバリの移住規模については、Abel Châtelain, "L'attraction des trois plus grandes agglomérations françaises: Paris-Lyon-Marseille en 1891", *Annales de démographie historique*, 1971. を参照。
- 7) 1889 年の国籍法 Code de la nationalité により、父親がフランス生まれの場合は出生時に、父親が外国生まれの場合は成人時の二十一歳に拒否しなければ、自動的に外国人の子供はフランス人に帰化されるようになった。又、女性は婚姻時に、配偶者の国籍を取得することも定められた。この 1889 年の国籍法の意義については本論で後述する。Cécile Mondonico-Torri, "Aux origines du Code de la nationalité en France", *Le Mouvement social*, no. 171, 1995, pp. 31-32; Jacqueline Lacroix et Suzanne Thave, "Les immigrés dans les recensements: décalages entre législation et outils de mesure", *Revue française des Affaires sociales*, no. 2, 1997, p. 75; Pierre Milza, *Français et Italiens à la fin du XIXe siècle, II*, Rome, 1981, p. 174.

- 8) Dupâquier, op. cit., pp. 215-218.
- 9) パリに関する移住の歴史研究では、ルイ・シュヴァリエの一連の著作がまず重要である。Louis Chevalier, *La formation de la population parisienne au XIXe siècle*, Paris, 1950. Idem. *Classes laborieuses et classes dangereuses à Paris pendant la première moitié du XIXe siècle*, Paris, 1958. [ルイ・シュヴァリエ, 喜安朗, 木下賢一, 相良匡俊訳『労働階級と危険な階級』みすず書房, 1993年.] 以上の諸研究については, 木下賢一「19世紀パリ民衆の世界—ルイ・シュヴァリエの歴史人口学的研究を中心に」『駿台史学』59号, 1983年9月. を参照。社会学や民族学の影響を受けて, 特定の地方出身者集団を分析した1970年代以降の研究としては, Françoise Raison-Jourde, *La colonie auvergnate de Paris au XIXe siècle*, Paris, 1976. 及び, パリの地方出身者の特集号である, *Ethnologie française*, vol. 10, no. 2 1980. などが挙げられる。(同特集号の Alain Corbin, “Les paysans de Paris: Histoire de Limousins du bâtiment au XIXe siècle”, のみが邦訳されている。アラン・コルバン「出稼ぎ労働者の生態—パリの建築業界で働くリムーザン地方出身者の歴史—」アラン・コルバン, 小倉孝誠他訳『時間・欲望・恐怖—歴史学と感覚の人類学』藤原書店, 1993年.) 1980年代までのフランスの研究成果を利用した邦語研究として, 金子春美「十九世紀フランスにおける人口動態と都市化—パリの事例を中心に—」『地域研究』8号, 1990年. がある。近年フランスでは, 特定の地方出身者のみを分析し, 同郷婚と集住を強調する諸研究の批判的検討が行われてもいる。Paul-André Rosental, “Maintien/Rupture: Un nouveau couple pour l'analyse des migrations”, *Annales E. S. C.*, vol. 45, no. 6, 1990. アラン・フォール, 長井伸仁訳「彼らはいかにして『パリ人』となったか—19世紀末パリ移住民の統合をめぐる—」『西洋史学』195号, 1999年.
- 10) William H. Sewell, Jr., *Structure and Mobility: The Men and Women of Marseille, 1820-1870*, Cambridge, 1985.
- 11) Ibid., pp. 318-319. シーウェルは1967年頃からフランスで研究を行っていたが, フランスでは戸籍に関する史料は百年後にしか研究者は利用できないので, 具体的には, 研究対象の期間が1869年までとなっている。Ibid., p. 9.
- 12) Renée Lopez et Emile Temime, *Histoire des migrations à Marseille, II, : L'expansion marseillaise et l'invasion italienne (1830-1918)*, Aix-en-Provence, 1990.
- 13) 国内移住者については, 19世紀前半の浮動人口と19世紀末の状況について簡単に触れられている程度である。Ibid., pp. 34-35, 145. 又, イタリア人に関する考察は, Milza の研究に大きく依拠している。
- 14) 国勢調査の開始の年次は, 1801年, 1806年, 1836年と諸説ある。本稿ではマルセイユに重大な影響をもたらした, ナポレオンによる大陸封鎖が行われた年である1806年から第一次大戦前の1911年までを, 主な考察の対象期間としている。国勢調査の開始年次の問題に関しては, Dupâquier, op. cit., pp. 26-27, 55, 121; Lacroix et Thave, op. cit., p. 72. を参照。
- 15) 統計年鑑は分散しがちな, 様々な行政機関から刊行された諸統計を要約し, 一般人にも利用し易くする目的で刊行された。Ministère de l'Agriculture et du Commerce, Service de la Statistique Générale de France, *Annuaire statistique de la France*, 1878, Paris, avant-propos, reproduit, Nendeln, Liechtenstein, 1968.
- 16) Ministero degli Affari esteri, Commissariato dell'emigrazione, *Emigrazione e colonia*, Raccolta di rapporti dei RR. Agenti diplomatici e consolari, Vol. I: Europa, Parte I: Francia, Roma, 1903. (以下 Rossi, *Emigrazione e colonia* と略記) マルセイユ領事管区 Il distretto consolare di Marsiglia にはブーシュ＝デュ＝ローヌ県を始めとするプロヴァンス地方の諸県と, 南西部のラングドック地方の諸県, 合わせて13県が含まれるが, マルセイユにおける, 特に労働者に関する報告が多い。
- 17) Dupâquier, op. cit., pp. 32-33, 36-44; Alexis Spire et Dominique Merllié, “La question des origines dans les statistiques en France: Les enjeux d'une controverse”, *Le Mouvement social*, no. 188, 1999, pp. 121-123. 国籍と宗教の調査事項は1856年の調査では削除されたが, 国籍は1861年か

- ら再び調査され続け、宗教は第三共和政期の1872年まで調査された。Ibid., p.123.
- 18) Dupâquier, op. cit., pp. 44-51, 167-168.
 - 19) Ibid., p. 35, 37-38, 167-168.
 - 20) 国勢調査による移住分析の問題点としては、調査事項の変更や追加が頻繁に行われていたこと、五年ごとの出生地による調査であること、他県出身者という調査事項のために県内や市町村 communes 内の移動が把握できないこと、出稼ぎ労働者や一時滞在者の調査が極めて不十分であることなどが挙げられる。White, op. cit., p. 14; Rossi, *Emigrazione e colonie*, p. 251.
 - 21) Sewell, op.cit., pp. 15-18; Jean-Luc Pinol, dir., *Atlas historique des villes de France*, Barcelona, 1996, p. 182. 18世紀のマルセイユの状況については、深沢克己「フランス港湾都市の商業ネットワーク」辛島昇、高山博編『地域の世界史3 地域史の成り立ち』山川出版社, 2000年, 217-230頁. を参照。
 - 22) Sewell, op. cit., p.1 ; 北岸菜穂子「18世紀におけるマルセイユの防疫体制」神戸大学・西洋経済史研究室編『ヨーロッパの展開における生活と経済』晃洋書房, 1984年, 239-240頁.
 - 23) Sewell, op. cit., p.1. バン屋の息子としてマルセイユに生まれ、後に歌や詩を書き成功を収め、マルセイユで最も名高いシャンソニエ *chansonnier* の一人となったヴィクトール・ジェリュ Victor Gelu (1806-1885) は1810年代に幼年時代を過ごし、大陸封鎖の影響で当時のマルセイユでは、「波止場には誰もおらず、街は死んだようであった。」と回想していた。Victor Gelu, *Marseille au XIXe siècle*, édité par Pierre Guiral, Lucien Gaillard et Jorgi Reboul, 1971, p. 31. ジェリュについては以下も参照。Pierre Guiral et Félix Reynaud, dirs., *Les Marseillais dans l'histoire*, Toulouse, 1988, pp. 132-133.
 - 24) Sewell, op. cit., pp.146-147; Milza, op. cit., p. 217; Docteur Hippolyte Mireur, *Le Mouvement comparé de la population à Marseille, en France et dans les états de l'Europe*, Paris, 1889, p. 22; Joseph Mathieu, *Marseille: Statistique et histoire*, Marseille, 1879, pp. 7-8.
 - 25) Mathieu, op. cit., pp. 34-36.
 - 26) Mireur, op. cit., pp. 341-342.
 - 27) Ministère du Commerce, de l'Industrie, des Postes et des Télégraphes, Direction du Travail, Bureau de la Statistique Générale de France, *Résultats statistiques du dénombrement de 1896*, Paris, 1899, pp. 170-171.
 - 28) Mireur, op. cit., p. 342.
 - 29) Sewell, op. cit., pp. 161-164.
 - 30) Ibid., pp. 165-177.
 - 31) Michel Vovelle, "Le prolétariat flottant à Marseille sous la Révolution française", *Annales de démographie historique*, 1968, pp. 125, 128. 表4の出生地の分類はシーウエルの基準に従って作成した。又、ガルニの宿泊者の構成は、19世紀前半までは大きな変化がなかったことが以下で指摘されている。Lopez et Temime, op. cit., p. 35.
 - 32) Vovelle, op. cit., pp. 125, 127.
 - 33) Sewell, op. cit., pp. 23-30, 34. 石鹼製造や砂糖の精製は18世紀からすでに主要産業ではあった。Ibid., pp. 23, 26.
 - 34) Lucien Gaillard, *La vie quotidienne des ouvriers provençaux au XIXe siècle*, Paris, 1981, p. 146.
 - 35) 表5では近隣地域からの移住者の割合は低下しているが、実数は遠隔地域からの移住者と同様に増加していた。Sewell, op. cit., pp. 193-210.
 - 36) Ibid., pp. 257-266. 危険な側面もあったが、女性移住者は女中になれば、ブルジョワの男性と結婚をして社会的上昇を遂げる機会が増えた。女中の社会的移動の問題に関しては, Theresa McBride, *The Domestic Revolution: The Modernization of Household Service in England and France, 1820-1920*, New York, 1976. を参照。

- 37) Paul Masson, dir., *Les Bouches-du-Rhône: Encyclopédie départementale, XIII, La Population*, Paris et Marseille, 1921, p. 188; Mathieu, op. cit., pp. 25-27.
- 38) Masson, op. cit., p. 189; Mathieu, op. cit., pp. 25-27; Lopez et Temime, op. cit., pp. 49-50, 190.
- 39) René Giraut, *Diplomatie européenne et impérialismes: Histoire des relations internationales contemporaines, I, 1871-1914*, Paris, 1979, pp. 28-30. [ルネ・ジロー, 渡邊啓貴他訳『国際関係史 1871-1914年—ヨーロッパ外交, 民族と帝国主義—』未来社, 1998年, 54-57頁.]
- 40) Gerard Noiriel, *Le creuset français: Histoire de l'immigration aux XIXe-XXe siècle*, Paris, 1988, p. 73-74.
- 41) 参考し得たいくつかの当時の文献では、「イタリア人」はジェノワ Genois (ジェノヴァやリヴィエラ海岸出身の人) やピエモンテ Piémontais (ピエモンテ出身の人) と呼ばれるか、蔑称でバシヤン Bachins と言われていた。なお、バシヤンという言葉は、1850年代まではマルセイユのイタリア人の中で最も多数の集団であったジェノワに、1860年代以降から19世紀末まではジェノワに代わって増加したピエモンテに対して用いられていたが、イタリア人全体を意味する場合もあった。19世紀末にはバシヤンではなくバビ Babi という言葉が、イタリア人、特にイタリアの中部や南部出身の人たちであるナポリタン Napolitains に使われるようになった。Sylvie Mouren, *L'image de l'étranger en Provence (fin XVIIIe-début XXe)*, mémoire de maîtrise d'histoire, Aix-en-Provence, 1988, pp. 33, 45-46, 62-63. しかし、国勢調査には1861年のイタリア統一以前から、国籍の調査事項の分類にイタリア人 Italiens との記載があった。Catherine Gousseff, "L'élaboration des catégories nationales dans les recensements français au XIXe siècle (1851-1891): quelques éléments d'interprétation", *Revue française des Affaires sociales*, no. 2, 1997, p. 57.
- 42) François Mazuy, *Essai historique sur les moeurs et coutumes des Marseillais au XIXe siècle*, Marseille, 1853, p. 179. フランソワ・マジユイ (1813-1862) は、つましい靴工として長い間生計を立てていたが、文学にも熱中していくつかの詩も残した。しかし、上記の歴史エッセイの方がよく知られており、歴史家にもしばしば引用される。彼は1848年に穏健共和主義者として憲法制定議会に立候補するが落選。その後は様々な職業を試みるが、失敗を繰り返して極貧に陥り、街の境界線と当時の人々に考えられていたジャレ川のほとりで首吊り自殺をした。Paul Masson, dir., *Les Bouches-du-Rhône: Encyclopédie départementale, XI, Biographies*, Marseille, 1913, pp. 330-331.
- 43) Gelu, op. cit., pp. 382-383. フランシオとはフランス語を話す人、特に北部出身の移住者を意味する。Sewell, op. cit., p. 145; Mazuy, op. cit., pp. XIV-XV, 181. ちなみに、1861年のマルセイユの人口は約26万人で、そのうち約15万人がブーシュ＝デュ＝ローヌ県出身者であった。Mathieu, op. cit., pp. 25-26.
- 44) Mouren, op. cit. p. 37; Gaillard, op. cit., pp. 146-147.
- 45) Mazuy, op. cit., p. XIV.
- 46) Ibid., p. XV. もちろん、これらの証言は彼の個人的見解であり、一般の心情や状況を誇張しようとしたものではあるだろう。
- 47) Abel Châtelain, *Les migrants temporaires en France de 1800 à 1914*, Lille, 1976, pp. 607-608. ここで図2-Aをもう一度見てみると、近隣諸県からの移住の流れはまだ重要な印象を受ける。しかし、1891年のブーシュ＝デュ＝ローヌ県における、表8の近隣諸県四県(アルプ＝マリティーム、ヴァール、エロー、ヴォークリューズ)出身者は合計50,068人であったが、二十年後の1911年においても合計は51,269人までにしか増えなかった。一方、この期間だけでもブーシュ＝デュ＝ローヌ県のイタリア人は、82,320人から114,635人へと増加していた。Ministère du Commerce, de l'Industrie, des Postes et des Télégraphes, Office du Travail, Bureau de la Statistique Générale de France, *Résultats statistiques du dénombrement de 1891*, Paris, 1894, pp. 482-494, 506 (以下 *dénombrement de 1891* と略記); Ministère du Travail et de la Prévoyance Sociale, Bureau de la Statistique Générale de la France, *Résultats statistiques du recensement général de la population effectué le 5 mars 1911*,

- Paris, 1913-1915, t.1-2^e partie, p. 139; t.1-4^e partie, pp. 30-39. (以下 *recensement de 1911* と略記) なお、図 2-A の矢印はおよそ五千人以上を示すようであるが、アルプ=マリティーム県（ニース）への移住の流れだけは新たに付け加えておく必要があるであろう。1911 年のアルプ=マリティーム県におけるヴァール県出身者は 8,616 人、ブーシュ=デュ=ローヌ県出身者は 6,779 人であり、さらには、いくつかの保養都市の存在のゆえにセーヌ県出身者が 8,374 人も数えていた。*recensement de 1911*, t.1-4^e partie, pp. 30-39.
- 48) Mathieu, op. cit., p. 9. ジョゼフ・マチウ（1829-1911）は、新聞や雑誌に統計や地方史の記事を書いていたが、市長の個人秘書、商業会議所や地理学協会の司書官や古文書係なども勤めた。Masson, *Biographies*, p. 326.
- 49) 外国人人口に占める 91% というイタリア人人口の割合は、1901 年以前にも今日に至るまでも、決して越されることのない割合であった。Lopez et Temime, op. cit., p. 72. 又, Ibid., p.70. では、表 6 の 1872 年のイタリア人人口を 26,052 人としているが、明らかな過少推計で減少はあり得ず、普仏戦争（1870 年）前に 30,000 人は優に超えていたに違いないと説明が加えられている。Ibid., pp. 71, 191.
- 50) Rossi, *Emigrazione e colonie*, pp. 267-268. 自らの申請による帰化とは、外国人の男性と結婚したフランス人女性がフランス国籍の回復を申請した場合や、居住認可を得て三年後の外国人か、フランス人女性と結婚して一年後の外国人かが申請した場合などである。Ibid., pp. 268-269; Milza, op. cit., p. 174.
- 51) Eugène Rostand, "L'immigration et la concurrence non indigène de main-d'oeuvre à Marseille", *Bulletin du Comité des travaux historiques et scientifiques*, Section des Sciences économiques et sociales, 1888, p. 110. 外国からの移住を意味する「移民 immigration」という語は、第三共和政期の 1880 年代に人口問題を扱った文献で頻繁に用いられるようになった。Noiriel, op. cit., pp. 78-80.
- 52) François Bernard, "Les conditions du travail et les grèves récentes à Marseille", *Journal des Économistes*, mars 1884, p. 414.
- 53) Rostand, op. cit., p. 110.
- 54) Bernard, op. cit., p. 414.
- 55) マルセイユのイタリア人の犯罪に関しては以下を参照。James M. Donovan, *The Relationship between Migration and Criminality in Marseille, 1825-1880*, Ph. D. dissertation, University of Syracuse, 1982, pp. 198-252; Laurence Montel, *La Violence quotidienne à Marseille sous le Second Empire: Coups et blessures, rébellions et vols de 1859 à 1870*, mémoire de maîtrise d'histoire, Université de Paris X-Nanterre, 1997, pp. 116-129.
- 56) Masson, *La Population*, chap. X, par M. H. Barré, pp. 361-362. 1841 年から 1910 年までのフランスとマルセイユの犯罪動向の分析における見解。
- 57) Bernard, op. cit., p. 413; Rostand, op. cit., p. 103.
- 58) Georges Liens, "Les Vêpres Marseillaises (juin 1881) ou la crise franco-italienne au lendemain du traité du Bardo", *Revue d'Histoire moderne et contemporaine*, vol. 14, 1967. この事件の経過を簡単に説明すると、1881 年の 6 月 17 日の金曜日に、最初の遠征軍がチュニジアからマルセイユのジョエット埠頭に帰港し、まるで祭りのような雰囲気の中で遠征軍が共和国通りを行進した。そして、旧港にちょうどたどり着いた時にどこからか口笛が聞こえ、興奮していた群衆がすぐさま近くの建物の二階にある、イタリア人の実業家たちの集いの場であった私営の「イタリア国民クラブ Club nazionale italiano」からだと判断した。イタリア人を激しく非難する群衆をその日は憲兵隊や警察が立ち退かせたが、翌 18 日から事件は始まる。大部分が二十歳以下のネルヴィ nervis と呼ばれる、ならず者の若者たちがイタリア人の日雇い労働者の集団をまず攻撃した。19 日にはナイフやピストルで武装したイタリア人労働者たちが前日の復讐を開始し、20 日には都市の中心部でならず者の若者たちが再び「イタリア人狩り」を行った。三日間に及んだ「マルセイユの晩課事件」の公式の最終報告では、

- 2名のフランス人と1名のイタリア人の死亡者、21名の入院した負傷者、そのうち15名がイタリア人労働者であるとされた。しかし実際には、イタリア人に殺された2名のフランス人のうち一人はスペイン起源の若者で、もう一人はイタリア起源の若者であった。Ibid., pp. 7-13. ジョルジュ・リヤンはならず者の若者であるネルヴィによって、事件が起こされたことを強調するが、フランス人労働者とイタリア人労働者の敵対関係の事例としてこの事件を扱う研究もある。Lopez et Temime, op. cit., pp. 129-141; Mouren, op. cit., pp. 53-57. ただし、事件は都市の中心部のイタリア人に関わるもので、都市の北部に住む多くのイタリア人たちなどは行動を起こさず、全く静かな状態であったことは覚えておくべきであろう。Liens, op. cit., pp. 12, 14-17.
- 59) Milza, op. cit., p. 217; Giraut, op. cit., pp. 28-30. [邦訳 54-57頁]
- 60) Lacroix et Thave, op. cit., pp. 75-76. 1804年の国籍法では、フランス人の父親から生まれた子供しかフランス人と認められなかった。1851年の国籍法で、父親がフランス生まれの場合は、外国人の子供も出生時にフランス人と申告することができた。しかし、成人時にフランス国籍を放棄することが可能であったので、兵役を逃れるのは容易であり、実際に兵役に参加する人もわずかであった。それで1889年の国籍法では、父親もフランス生まれの外国人の子供は、成人時のフランス国籍の放棄はもはや認められず、出生時に自動的、つまり強制的にフランス人に帰化された。Ibid., pp. 73-75; Mondonico-Torri, op. cit., pp. 31, 39; Spire et Merlié, op. cit., p. 122. 又、外国人の管理を目的として、到着から15日以内に居住地を役所に申告する義務が、すべての外国人に対して1888年に法で定められてもいた。Lacroix et Thave, op. cit., p. 75; Rossi, *Emigrazione e colonia*, pp. 265-266.
- 61) Milza, op. cit., p. 174; Rossi, *Emigrazione e colonia*, pp. 275-277. マルセイユ市は外国人に行商を禁じる条例を1890年に制定してもいたが、この法が実行されることはなく、イタリア人たちは行商を営み続けていた。Lopez et Temime, op. cit., p. 193; Rossi, *Emigrazione e colonia*, p. 258.
- 62) Milza, op. cit., p. 174. 法の制定時には外国人労働者の代理人は、フランスに居住していなければ補償金を受け取ることは認められておらず、家族を連れてこられない出稼ぎ労働者のイタリア人などは不利な条件にあった。Rossi, *Emigrazione e colonia*, pp. 301-303.
- 63) Mouren, op. cit., pp. 65-66; Milza, op. cit., p. 174; Rostand, op. cit., p. 106.
- 64) Rossi, *Emigrazione e colonia*, pp. 272-273. 毎日の平均の費用は2.50リラではなく2.50フランの誤りであると思われる。ロッシは別の箇所、独身の労働者がマルセイユで一日に必要な住居費と食費は2.50フランと計算している。Ibid., p. 287.
- 65) Ibid., p. 273.
- 66) Lopez et Temime, op. cit., p. 23; Milza, op. cit., p. 181.
- 67) Ministère de l'Agriculture et du Commerce, Service de la Statistique Générale de France, *Annuaire statistique de la France*, 1892-1893-1894, Paris, p. 62, reproduit, Nendeln, Liechtenstein, 1968. ベルギー人は4,366人だけであった。
- 68) G. Yver, "Émigration italienne", *Annales de géographie*, no. 26, 1897, p. 132.
- 69) Lopez et Temime, op. cit., pp. 23-24.
- 70) Milza, op. cit., pp. 218-220. 1886年の数値は、Mireur, op. cit., p. 21. 1911年の数値は Masson, *La Population*, p. 181.
- 71) Rossi, *Emigrazione e colonia*, pp. 252-253.
- 72) Milza, op. cit., pp. 174-175. イタリアからの移民の数量的動向については、北村暁夫「イタリア自由主義期における移民と植民」『歴史学研究』613号1990年、143-147頁。を参照。
- 73) Joseph Mathieu, "Les Italiens à Marseille", *Annales administratives et statistiques des Bouches-du-Rhône*, 1884-85, pp. 217-219. 両大戦期間のフランスのイタリア人は、フランス人のマルサス主義を吸収して、子供の数が減少傾向にあったことが以下で指摘されている。村上真弓「移民の『同化』とイタリア人集合体—両大戦期フランスの場合—」谷川稔他『規範としての文化—文化統合の近代史』356頁。

- 74) Mathieu, "Les Italiens à Marseille", p. 218.
- 75) シーウェルは 20 万人分近くもある人口調査原簿を分析するために、世帯の 10%系統抽出標本を選択した。Sewell, op. cit., pp. 119, 319.
- 76) Ibid., pp. 35-37; Marcel Roncayolo, "La croissance urbaine de Marseille", *Revue municipale, Marseille*, no. 56, 1964, pp. 4-6.
- 77) Sewell, op. cit., pp. 37-38; Montel, op. cit., p. 205. 19 世紀前半まではいくつもの大通りが建設された都市の南部は、第二帝政期の 1850-1860 年代になると地理的な拡大は都市北部に比べてはるかに劣っていた。ただし、第二帝政期に商業中心地として新たな発展を遂げており、様々な金融機関や行政機関が集中していた。Roncayolo, op. cit., p. 6; Sewell, op. cit., pp. 41-42.
- 78) Marcel Roncayolo, *Marseille, les grammaires d'une ville: Essai sur la genèse des structures urbaines à Marseille*, Paris, 1996, p. 466; Montel, op. cit., p. 206.
- 79) Ibid., p. 206; Pinol, op. cit., p. 149; Anne Sportiello, *Les pêcheurs du Vieux-Port: Fêtes et traditions de la communauté des pêcheurs de Saint-Jean*, Marseille, 1981, p. 77. 旧港に面したサン＝ジャン街区の一部は、1863 年に県知事モバ Maupas によって「赤線地帯（売春指定地区 le quartier réservé）」の創設が許可されており、娼家の看板の傍らでバーやレストラン、食料品店、薬屋、理髪店、小物商店などが開かれ歓楽街と化していた。Marie-Françoise Attard-Maraninchi, *Les filles du port: des Marseillaises 《pas comme les autres》*, *Revue municipale, Marseille*, no. 166, 1993, p. 66; Jean Bazal, *Marseille Galante*, Marseille, 1980, pp. 25, 29.
- 80) Ministère du Commerce, de l'Industrie, des Postes et des Télégraphes, Direction du Travail, Service du Recensement, *Résultats statistiques du recensement général de la population effectué le 24 mars 1901*, Paris, 1904-1907, t.1, pp. XVII-XVIII; t.2-2^e partie, pp. 642-643, 652-653, 657-680. (以下 *recensement de 1901* と略記) 1901 年のプーシュ＝デュ＝ローヌ県の総人口は 738,178 人で、マルセイユの総人口は 491,161 人（県の総人口の約 67%）であった。又、県のイタリア人人口の 98,631 人のうち、90,111 人がマルセイユのイタリア人人口であり、県のイタリア人人口の約 91%も占めていた。
- 81) ただし、失業率はあくまでも通常は事業所に雇用されて働いているが、調査時に一時的に失業中であったものからの計算に過ぎない。日雇いの出稼ぎ労働者などの存在も別に考慮する必要があるであろう。なお、女性の労働力人口の問題については、中野隆生「女性と労働—十九世紀のフランス」歴史学研究会編『講座世界史 第 4 巻 資本主義は人をどう変えてきたか』東京大学出版会、1995 年が参考になる。
- 82) Masson, *La Population*, p. 185.
- 83) Ibid., pp. 185-186; Sportiello, op. cit., pp. 77-78; Milza, op. cit., pp. 219-220.
- 84) Masson, *La Population*, pp. 182-183, 185-186.
- 85) 都市の南部や南東部の郊外は、1851 年頃までは工業地帯として重要であったが、新港の建設以後は工業の発展の中心は都市の北部へと移行していた。Sewell, op. cit., pp. 123-126.
- 86) 特に、トスカーナ州にあるルッカ Lucca の周辺の村々からやって来た女性は、乳母として最も高く評価されていた。Masson, *La Population*, p. 183; Lopez et Temime, op. cit., p. 88.
- 87) さしあたり、第二次大戦後の移民の問題については、宮島喬「ヨーロッパにおける移民労働者問題の変容と現状—フランス社会とマグレブ移民の問題を中心に—」『歴史学研究』581 号、1988 年 6 月。を参照。
- 88) 例えば、1851 年の時点では、国籍の調査事項の分類はベルギー人、イタリア人、スイス人、スペイン人、イギリス人、ドイツ人、そして五千人近くの政治亡命者がいたポーランド人の 7 つの国籍と、その他の国籍、国籍不詳に分かれていたが、スペイン人にはポルトガル人が含まれ、ベルギー人にはオランダ人が含まれている状態であった。それが、1891 年には 22 の国籍にまで増加して、第一次大戦までは大きく変化することはなかった。Gousseff, op. cit., pp. 54-58.

マルセイユにおける移住現象（1806-1911年）

- 89) マルセイユの移住者を扱った都市研究では、旧市街の諸街区に注目したものが中心である。旧港沿いのサン＝ジャンで暮らしていたナポリからのイタリア人について、Anne Sportiello, *La mémoire collective d'une immigration: le cas des pêcheurs napolitans du Vieux-Port de Marseille*, thèse de IIIe cycle, Aix-en-Provence, Université de Provence, 1983. サン＝ジャンの裏手にあるパニエにおける、19世紀の移住者の一般的状況について、Muriel Hubert, *Evolution du quartier du Panier au XIXe siècle*, mémoire de maîtrise d'histoire, Aix-en-Provence, 1993. 特に20世紀前半のコルシカ島からの移住者について、Marie-Françoise Attard-Maraninchi, *Le Panier, village corse à Marseille*, Paris, 1997. などがある。

(2001年11月2日受付, 2001年11月2日受理)

Migration in Marseille (1806–1911)

—The transformation from internal migration to “immigration”—

KOKUBU Hisao

During the period from the nineteenth century to the beginning of the twentieth century in France, while population growth was stagnant due to the falling birth rate, the concentration of population was occurring in urban areas, which was in fact the process of urbanization. However, the labor force was insufficient with only the internal migrants in France where industrialization was progressing, so the country had little choice but to depend on immigrants from foreign countries.

Using statistical data, such as national census data etc., this paper aims to ascertain in a concrete manner the long-term trends of migration in Marseille. Marseille was a port city in southern France where internal migration played an important role and where foreigners, especially Italians, were extremely concentrated. This paper will also review what Marseillais thought of the phenomenon of migration at the time it was in the process of changing from internal migrants to foreign immigrants.

The percentage of Italians in the total population of Marseille reached a peak of 18% in 1901, which rose to 91% when looking only at the foreign population. Many of these Italians were working as factory workers in the industrial area in the northern part of the city, which had been constructed along with new ports in the late nineteenth century. However, in Marseille, they were also working in various jobs to meet varied labor force demand of the city.

Keywords: urbanization, Marseille, internal migration, immigration, Italians